

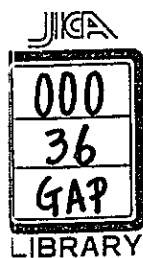
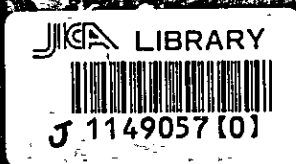
平成10年度

# 高校教師海外研修

■授業に役立つ開発教育教材集■



いっしょに見つめよう  
この世界







## はじめに

国際協力事業団 (JICA) は、政府開発援助 (ODA) のうち研修員の受け入れ、専門家・青年海外協力隊の派遣など主に人を通じた技術協力を実施している特殊法人です。

資源小国の日本は、必要な食糧、エネルギーなどの多くを開発途上国に依存し、また輸出においても緊密な関係にある開発途上国の抱える様々な問題に無関係であることはできません。環境、人口、エイズ、貧困などの地球規模の問題が顕在化し、国際社会でも関心が高まっている昨今、その問題解決のために顔の見える国際貢献として文字通り人を通じた国造りを支援しているJICAの責務は年々高まっています。

JICAの活動は、制度、価値観が日本とは異なる開発途上国の現場において効果的な援助を目指して努力している日本人専門家、青年海外協力隊員と将来の国造りを担う相手国関係者との緊密な協力関係に支えられております。JICAはこうした協力の現場を大切に活動を行っておりますが、日本にいる皆様にとってその国際協力の現場を知ることは、開発途上国をめぐる問題を私たち自身の問題として認識する上で参考にしていただけるものと思われまます。


JICAでは、より多くの高校生や高等学校の先生方に開発途上国が抱える問題と国際協力の意義について理解を深めていただくために、開発教育の支援に取り組んでいます。その一環として、全国の高等学校において開発教育を実践されている先生方、もしくは日本と諸外国との国際協力の実情について関心を持ち日頃から研究を重ねておられる先生方を対象に開発途上国における経済、社会、教育の実状やJICAの実施する国際協力の現場視察を目的とした研修旅行を実施しています。今日、地球社会の問題解決のために一人ひとりが行動することが求められていますが、次の世代を担う青少年の育成に貢献されている教員の皆様にJICA事業現場を視察いただくことは開発教育を推進する上でも有意義であると思われまます。

今回の研修では、モンゴル13名、メキシコ・エルサルヴァドル10名、マラウイ10名、合計33名の先生方に、7月から8月にかけて約2週間の研修に参加していただき、開発途上国及び国際協力に対する見聞や理解を深めていただきました。

この度、研修に参加された先生方のご協力により、研修で得た経験の授業での活用事例、研修参加レポートを冊子としてとりまとめました。この冊子が開発教育に取り組む全国の先生方の参考にしていただきたく、関係各位のご高覧に供したいと思ひます。

平成11年2月

国際協力事業団  
総務部長 小町 恭士



はじめに



1149057(0)

## 第1章

## 研修成果を生かした授業実践例

- 倫理における開発教育の一例 ————— 女屋 隆充 4  
 ～モンゴルでの体験を導入として～
- 国際理解教育の展開 ————— 富山 隆志 14  
 ～自分たちと他の人々～
- 地球的課題の学習で取り組んだ開発教育 ————— 西尾 源寿 20  
 ～受験地理の授業を改善する試み～

## 第2章

## 研修レポート

- ありがとう  
 ジゴモ、マラウイ!! ————— 衛藤 朋子 28
- メキシコ、エル・サルヴァドルを吹く風 ————— 成瀬 牧己 34
- 草原と青い空に夢とロマンを求める人達と出会って —— 加藤 敦史 40  
 ～モンゴルを訪問して～

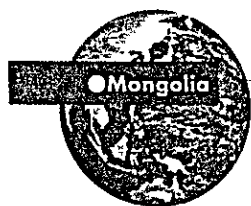
## 参考資料

1. 募集概要 ————— 44
2. 事前研修 ————— 44
3. コース別日程／参加者氏名 ————— 45
4. 開発教育関係団体及び教材紹介 ————— 48

第  
1  
章

**研修成果を生かした授業実践例**





# 倫理における開発教育の一例

～モンゴルでの体験を導入として～

TAKAMITSU ONAYA

女屋 隆充

公民

東京都立多摩工業高等学校

## 1 はじめに

この授業は3年生必修の倫理で試みたものである。過去に選択社会の授業で開発教育的なことがらを扱ったことはあったが、倫理で取り組んだことは一度もなかった。

今回の授業にあたり、私は2つのことを意識した。1つ目が科目の特徴をどう具体化するかという点である。倫理は「生き方」・「在り方」を問う科目なので、開発教育にこの視点をどう活かせるかがポイントだと思った。もう1つがモンゴルでの研修成果をどのように授業に活かすかという点であった。あれこれ考え、まずはモンゴルの様子から始め、最後は国際社会全体の問題へ広げるプランとし、全体で4時間の授業を行った。

## 2 実践の概要

実践科目名：倫理（2単位・必修）

対象学年：3学年全クラス（5クラス＝機械科2／電気科2／工業化学科1）

時間数：4時間

実施時期：10月下旬～11月上旬（2学期中間テスト後～文化祭までの期間）

## 3 実践内容について

### 1 時間目

モンゴルの暮らしは？

#### ■授業の流れ

研修国モンゴルにて撮影したVTRから、以下の5シーンを選び、見せた。

- ① ウランバートルの様子
- ② モンゴルの風景
- ③ モンゴルの学校～第23外国語学校
- ④ モンゴルの音楽・民族衣装
- ⑤ 食料品売場（マーケット）の様子

やり方は以下の通りである。

2～3分VTRを流す→説明を加える+画面からわかったことや印象をメモさせる（資料1）→次のシーンを流す。（以下、くりかえし）時間は、約30分程度かかった。

見終わった後、①～⑤の各場面についてメモしたことを発言させ、それらを板書した。最後に補足説明を加え、授業を終えた。

#### ■1時間目のねらい

この授業は、4時間の導入と位置づけ、モンゴルについてのイメージを具体化させることを主眼とした。また、生徒たちの様子から、自作プリントや地図での説明から始めるよりも、VTRを見せ、視覚的に訴え



ゲルに干してあった干しチーズ



ウランバートルの様子

た方が入りやすいと判断した。生徒たちはモンゴルについての情報をほとんど持っていないと思われたので、彼らが身近に感じる題材は何かと考え、前ページの5つの場面を選択した。

授業方法論的になるが、VTRを数分見せて説明し、また見せるといったやり方は、生徒の集中力を保つという点では1時間中流すよりも効果的であったと思われる。

#### ■生徒たちの発言

主なものを並べてみた。

- ・ウランバートルは、首都なのに、車も人も少なかった。
- ・道路は広いが、建物は古ぼけていた。

- ・草原の国というのは本当だった。
- ・岩がごつごつしている山が多かった。(奇岩の景勝地を訪問したシーンだったためと思われる。)
- ・モンゴルの学校の生徒は、日本語が驚くほど多かった。
- ・マーケットに並んでいるものは、日本とあまり変わらなかった。でも、並び方や売り方は違う。

見たままの答えが多かったと思う。学年5クラスの反応は様々であったが、導入としてはまずまずであった。

### 2時間目

#### 1枚の写真からわかること

##### ■授業の流れ

まず、クラスを6～7グループに分けた。続いて、研修中に撮影した写真のカラーコピー（B4サイズ・厚紙に貼りつけたもの。写真はすべてモンゴルの人が写っているもの）を8枚用意し、それぞれ適当なものを選ばせた。(次ページ写真1～8)

それから、課題を与えた。内容は、「1枚の写真からわかることをもとに、グループで自由にストーリーを作ってみよう」というものであった。(資料2)

約15分ほどストーリー作りをさせた後、各グループから発表させ、最後に次の質問をした。「この写真の人たちは、幸せそうですか？不幸せそうですか？」

「もし、自分がここで暮らせといわれたら、どうですか？」

##### ■授業のねらい

この授業では、1時間目に見たモンゴルの印象と、モンゴルの人々の表情とが結びつくかを考えさせようとした。私たちは日本という「先進国」に住んでいるため、「開発途上国」に生活する人々を「低く」見がちである。こういった見方の妥当性を検討する授業でもよかったのだが、ここでは「低く」＝「不幸」というイメージでとらえていないかを考えさせようとした。物質的に豊かな国民が幸福で、そうでない



写真1 峠であったヤギ飼い(?)の男性



写真5 第1バス公社



写真6 マーケット(サバ)の女性



写真2 23中学校の生徒たち



写真7 テレルジの観光用牧場で働く少年



写真3 ゲル

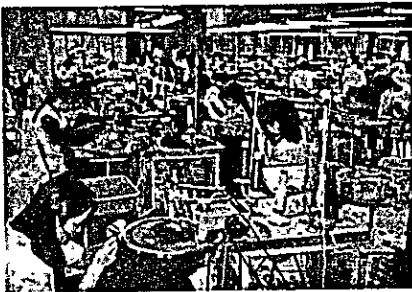


写真4 「GOBI」(カシミア工場)の女性たち



写真8 テレルジの観光用牧場で働く女の子



人々が不幸であるということは一面的な見方なのではないか？。こんな疑問を持たせられれば大成功と考えていた。

ストーリー作りという授業方法を取り入れたのは、各自の感覚で自由にモンゴルの人々の暮らしをつかませたいと考えたからである。この時間のヒントは、国際協力事業団（JICA）東京国際研修センター（TIC）での事前研修にあった。そのときは、複数の写真のカラーコピーを使ったストーリー作りであった。今回、グループ1枚ずつとしたのは、注意してみれば1枚の写真からでも色々なことはわかるし、複数の写真を使うより想像力がふくらむのではないかと考えたからである。

1時間使ってストーリー作りで「遊ばせ」、最後の質問で「考えさせる」。「正解」を求めず、押しつけない。こんな授業にしようと思った。

### ■生徒たちの作ったストーリー（写真5より）

ワタシ、バット、モンゴル人。今日モバス工場で働イテイマス。メンバーハバクサント、日本人ノ山本サン。今日ハ、エンジンノメンテナンスヲシマシタ。コノエンジンハ、日本カラ持ッテキタモノデス。コレヲ直スノニ、大変デシタ。2時ゴロカメラマンノ池田サンガヤッテキテ、取材ヲシマシタ。ソレデ写真ヲ撮リマシタ。ドウデスカ、僕タチガンバツテルデショ？コウシテ僕タチノバスハモンゴルノ市内デ元気ヨク走ッテマス。8月5日バットノ日記ヨリ。

原文のままである。カタカナにしたのは、外国っぽくしたかったからだろうか？

なお、生徒たちに問いかけた最後の質問への反応の一例も付記しておこう。

「よくわからないけど、不幸には見えない。」「表情はやさしそうだと思う。」

「今ここ（モンゴル）で暮らせといわれたら、電化製品は使えるのか？使えないなら、不便だと思う。」

## 3時間目

### ■国同士の関係は？

#### ■授業の流れ

事前に、人数分の「情報カード」を準備しておいた。ここには、各国のGNP・人口・国土の面積・産業や暮らしの様子などが書かれている。（資料3）

時間のはじめにこのカードを1人1枚ずつ配布し、ワークシートも配った。（資料4）それから次のように指示をした。

「これから、自由に教室を動いて、5人と話をしよう。相手に自分のカードの内容を伝え、終わったら、相手のカードの内容を聞こう。お互いに話したら、相手の国とはどんな関係を持ちたいか？を決めてプリントに記入すること。理由も簡単に書いたら、別の人と話すること。なお、カードは見せないように。」約20分程度の時間をとった。

一通り作業が終わったら、自分の席に戻らせ、「答えが全部同じになったか？」と質問し、Yesの生徒・Noの生徒の挙手を求め、それぞれになぜ、そうだったのかを答えてもらった。

最後に、「国同士の関わり方はいろいろあるけれど、どういうつきあい方が望ましいと思うか？」と質問をしてみた。

#### ■授業のねらい

3・4時間目は、問題を一般化したいと考えていた。また、2時間目のストーリー作りの雰囲気や伸びやかだったので、この状態を何とか保ちたいと思った。そこで、ゲーム要素を取り入れた授業をすることにした。

世界には200弱の国や地域があり、それぞれの状況は大変幅広く、関わり方も多様である。こういった中で、どんな関係を持つことが望ましいのかを考えさせ、モンゴルと日本はどういった関わり方をすればいいのかを考えさせることをねらいとした。確認したかったことは、「先進国」が「開発途上国」へ施しを与えるという価値観に立つ関係は望ましいとはいえないこと、モンゴルと日本という2国間の関係は、日本が他

の国に対して持つ関わり方の延長線上にあるという2点であった。

生徒たちは、国際社会の複雑さについてほとんど知識はない。従って、「どんな関係がいい？」と聞いただけでは「遠い話だ……」と思われてしまう。そこで、少々乱暴だが、「身近な人間関係から考えるとどう思うか？」と尋ねて見た。

カードを使った作業の時間が長引き、前半部分は何とかカバーできたが、後半部分は時間切れとなり、4時間目に回すことになった。

### ■生徒たちの様子

教室を自由に動いたため、クラスに活気が出た。取り組み姿勢は、生徒によって多様であった。

いろいろな国同士のつきあい方については、「タテ関係の友だちつきあいはいやだ」という答えが出たので、そこから「公平（平等）なつきあい方がいいのではないか」と展開した。しかし、現実には、こうなっていないことはよく認識していたようであった。

### 4時間目

なぜ、日本はモンゴルに多くの援助をするのか？

#### ■授業の流れ

この時間もグループ学習の形態をとった。席の近く3～4人を1グループとし、以下の3つの質問をした。

- ①「なぜ日本はモンゴルに援助するのか？」
- ②「世界の国々が対等な関係を持てるために、日本がなすべきことは何か？」
- ③「世界の国々が対等な関係を持つために個人として何ができるか？」

約15分ほど時間をとり、各グループからの答えを板書した。

最後に、以下の3つのことばをキーワードとして紹介し、これからの国際協力についてのコメントを行い、授業を終えた。(資料5)

①かかわり……世界各国は様々なかかわりあいを持っている。だから、関係を持たないことはあり得ないし、関係を断ち切ろうとすることは望ましいとはいえない。

②公平……国連総会の1国1票制に見られるように、大国も小国も平等であるというのが原則。だが、経済力の差などにより、立場に強弱があるのが現実である。

③共生……競争と対立する考え方として紹介し、向かすべき理想的な考え方として、注目されている。

#### ■授業のねらい

3時間目にできなかったモンゴルと日本の関係について触れた後、国際関係全体へと広げていくことをねらいとした。国家間の望ましい関係として「対等な」という価値観を入れたのは、前の時間とのつながりを意識し、向かうべき方向の1つの考え方を示したかったからである。また、日本ができること・個人ができることの2つに分けたのは、自分たちが何をやっても、関係ないし意味がないというイメージを持たせたくなかったからである。

最後に3つのキーワードを示し、今後の国際協力についての指針を考えさせて、4時間の授業をしめくくった。

#### ■生徒たちの反応

質問事項が抽象的だったせいも、あるいはグループで議論する経験に乏しいためか、生徒たちの取り組みは前の3時間と比べ今ひとつであった。最後にまとめをしなければならぬといったあせりが私にあり、終わりは忙しいものとなってしまった。キーワードは、パソコンでB4サイズに拡大して打ち出し、それを提示したため、生徒の注意をひくことはできた。

## 4 おわりに

### — 今回の授業を実践して考えたこと —

今回、TICでの事前研修での開発教育の実践例に影響を受け、授業方法にゲームやグループ学習といったものを多く取り入れてみた。必修の授業なので、興味のある生徒もいれば、全く関心を示さない生徒もいる。普通の講義形式のスタイルとはかなり異なるやり方を彼らがどう受けとめるかは、私の関心事の1つであった。振り返ると、開発教育に見られる参加型学習は「多くの生徒たちに1時間飽きさせない授業を行う」という観点から見ると、かなり効果的だということがわかった。教室内を動く時間を取ったせいか、活気が出たし、楽しそうな表情で時間を過ごしている生徒たちが多かった。事実、生徒たちの感想もおおむね好評であった。

一方、このような学習方法を「楽しい」レベルに終わらせないためには、教師の周到な準備と明確な方向性が必要ではないかとも感じている。私は、生徒たち

の感性や自主性を大切にしながら、学ぶべき点、考えるべきことがらを外さず、深みのある授業を行うことが理想と考えている。別の表現をすれば、「にこにこ」「わいわい」→「ふ～ん」「う～ん」→「へ～え」「なるほどねえ」……こういった授業にしたいのである。今回の実践ではうまくできなかったが、教師には、生徒たちから出てくる様々な意見や感想などを注意深く受けとめ、こちらが目指すことがらに関わる反応があったときに、それを逃さず、そこから授業を展開させる力が求められると思う。

私はこれまで、倫理は「生き方」「在り方」を扱うのだから、自分の生き方を見つめさせる項目を授業にしようと考えてきた。従って、「宗教」、「ソクラテス」や「生と死の問題」など内面的なことがらが中心であった。国際関係の問題は私のこれまでの授業の流れからは異質だったので、とても新鮮な経験ができた。今回の実践での成果を踏まえ、これからの取り組みにつなげていきたいと考えている。

資料1

1998年 倫理 資料 PRINT モンゴルと日本 (1)

3 - ( ) No ( ) Name

○これから秋涼祭までの授業(約4時間)は、モンゴルと日本についてお話しします。

まず、この夏にモンゴルで撮影したVIDEOを流します。以下の項目についてメモしながら見てください。(途中でそれぞれのシーンについてコメントして進めます。)

1 ウランバートル市内

2 風景(バスからの車窓・遊牧民の暮らし)

3 第23外国語学校

4 博物館での音楽演奏

5 マーケット

\*遊牧民の住居

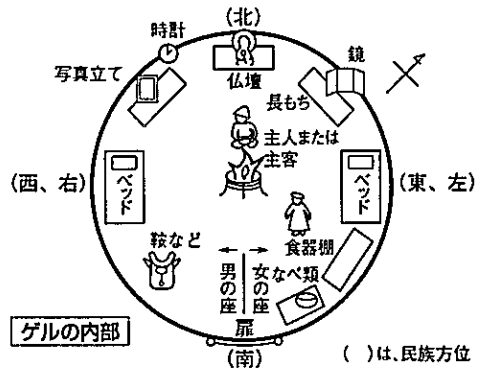
=内モンゴル自治区(中国)では=包(バオ)

・モンゴル牧民のポータブル住居。北アジア一帯に見られ、トルコ語ではユルタという。漢民族は包(バオ)と呼ぶ。天幕ともいう。モンゴル牧民は、季節ごとに移動して家畜を放牧させる。木の骨組みと羊毛からつくったフェルトの覆いでできており、解体・設営が簡単。

(【モンゴルは面白い】金岡秀郎著より)

・内部の配置

(【アジア読本モンゴル】小長谷有紀著より)



\*家畜=

・モンゴル語でタワン・ホショー・マル(五つの鼻づらの家畜)。ウマ・ラクダ・ウシ・ヒツジ・ヤギを指す。ウマは乗用等に、ヒツジは主たる食料になるため、モンゴル全土に分布する。ラクダはゴビ地方(南部)に多い。

(【モンゴルは面白い】金岡秀郎著より)

\*少年(弟)が演奏していた楽器=

・モンゴルの弦楽器。馬の弦楽器(モリンホール)といい、モンゴルのチェロと形容される。棹の先にウマの頭が彫刻され、胴体にはウマの皮を張る。ただし、蛇などの皮でもよい。弦、弓毛ともにウマの尾毛を束ねてつくる。

(【モンゴルは面白い】金岡秀郎著より)

\*青年(兄)の歌い方=

・一人で二つの声を出す歌い方。鼻のホーミー、胸のホーミーなど5種類の歌い方がある。ホーミーで歌うことをホーミードホという。西部モンゴルのアルタイ地方で始まったとされる。

(【モンゴルは面白い】金岡秀郎著より)

## 1998年 倫理 資料 PRINT モンゴルと日本 (2)

## ○1枚の写真から……

配られた写真からわかること、想像できることをまとめ、1つのストーリーを作ってみましょう。グループ内で相談し、以下の余白にあらすじをメモして下さい。後で、代表の人に発表してもらいます。(3分程度のストーリーで結構です)

\*あらすじ

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---

\*クラスは…… 3 - ( )

\*メンバーは……

\*配られた写真は……

## 資料3 カード(3時間目)の例 1つずつ切り、厚紙に貼りつけて配った。

No1 人口 約12億人 面積 約960万km<sup>2</sup> GNP 620ドル/人

この国は広い国土に恵まれ、平野では農業が盛んで、米や小麦を多く栽培しています。しかし、世界最大の人口を抱えるため 食料を輸入しています。豊富な石油 石灰 鉄鉱石などを使った重工業も盛んですが、施設が古しくて 効率がよいとはいえません。人口削減政策を実施しています。

No5 人口 約300万人 面積 約0.1万km<sup>2</sup> GNP 26,730ドル/人

この国は一部市がそのまま国となっています。貿易港として発展し 現在も多くの国々の企業が集まっています。街の中心部には高層ビルが建ち並び、熱帯特有の樹木があちこちで見られます。生活水準は高く物価も日本と大差ありません。厳しい法律のせいか、街はきれいです。多民族国家で、中国系の人々が経済的に力があると書かれています。

No2 人口 約4,500万人 面積 約10万km<sup>2</sup> GNP 9,700ドル/人

この国は経済成長が著しく、自動車産業やコンピューター産業でも先進国に肩を並べるまでに成長しました。しかし、政治的に隣国との対立が深く、軍事面に力を入れなければなりません。人々の暮らしは豊かで、教育や医療の水準も高い国です。

No6 人口 約6,000万人 面積 約50万km<sup>2</sup> GNP 2,740ドル/人

この国は暖かな気候と地形を活かし、木作りが盛んです。経済発展も著しく、食品加工業などで日本と関わりが深い国です。木材資源が道み環境問題も抱えるようになりまし。首都に人口が集中し 交通渋滞はひどくなっています。仏教が盛んな国です。

No3 人口 約230万人 面積 約160万km<sup>2</sup> GNP 310ドル/人

この国は草原が広がる遊牧民の国です。内陸国で、道路も未整備のため輸送にコストがかかり、なかなか有力な産業が育ちません。教育に力を注いでいますが、遊牧民の子供たちは学ぶ機会が乏しく、一方都市部ではストリートチルドレンが問題となっています。

No7 人口 約2億人 面積 約190万km<sup>2</sup> GNP 980ドル/人

この国は10,000以上の島からなる国です。日本からの観光客も多く、リゾートホテルやプライベートビーチも整備されています。木材資源に恵まれています。乱開発による森林破壊が深刻な状態になっています。石油を産出し 品質も良いため、たくさん輸出しています。

No4 人口 約7,200万人 面積 約33万km<sup>2</sup> GNP 240ドル/人

この国は戦後の「冷戦」に巻き込まれ、かつては国が2つに分かれていました。内戦も激しく多くの国民が祖国を離れ、難民となりました。数年前から、多くの外国企業が工場をつくり、生産を始めました。暖かい気候と豊かな自然に恵まれ、稲作が盛んに行われています。都市生活者の通勤は自転車かバイクで、ホンダのスーパーカブは大人気です。

No8 人口 約6,700万人 面積 約30万km<sup>2</sup> GNP 1,050ドル/人

この国は約8,000の島からなる国です。貧富の差が大きく、首都にはゴミの山にスラム街が広がっています。農業が盛んで、暖かな気候を生かした米作と大規模なバナナ農園が広がります。バナナ農園では、上空からの農業散布が行われるため、働く人たちの健康が心配です。

本カード作成にあたり「帝国書院 地歴高等地図」の一部データを参考とした。

## 1998年 倫理 資料 PRINT モンゴルと日本 (3)

3 - ( ) No ( ) Name

## ○「援助」？「協力」？

各自1枚ずつ国の様子（人口・面積・GNP・その他）がわかる「情報カード」を配布しました。これから、教室を自由に動き、友人の「カード」に書かれている内容を聞いて下さい。そして、その国に対し、自分の国はどんな関係を持ちたいか、以下の5つの中から選んで下さい。1人5つ（＝5人）くらいと話ししましょう。

=参考=

日本…人口1億2503万人（'94）  
面積37.8万km<sup>2</sup> GNP 34630\$/人（'94）

## 1 友人の国番号=No ( )

- ①自分の国は相手の国に援助したい
- ②自分の国は相手の国に協力したい
- ③自分の国は相手の国から援助を受けたい
- ④自分の国は相手の国から協力されたい
- ⑤自分の国は相手の国とは関係を持ちたくない

## 2 友人の国番号=No ( )

- ①自分の国は相手の国に援助したい
- ②自分の国は相手の国に協力したい
- ③自分の国は相手の国から援助を受けたい
- ④自分の国は相手の国から協力されたい
- ⑤自分の国は相手の国とは関係を持ちたくない

## 3 友人の国番号=No ( )

- ①自分の国は相手の国に援助したい
- ②自分の国は相手の国に協力したい
- ③自分の国は相手の国から援助を受けたい
- ④自分の国は相手の国から協力されたい
- ⑤自分の国は相手の国とは関係を持ちたくない

## 4 友人の国番号=No ( )

- ①自分の国は相手の国に援助したい
- ②自分の国は相手の国に協力したい
- ③自分の国は相手の国から援助を受けたい
- ④自分の国は相手の国から協力されたい
- ⑤自分の国は相手の国とは関係を持ちたくない

## 5 友人の国番号=No ( )

- ①自分の国は相手の国に援助したい
- ②自分の国は相手の国に協力したい
- ③自分の国は相手の国から援助を受けたい
- ④自分の国は相手の国から協力されたい
- ⑤自分の国は相手の国とは関係を持ちたくない

\*話した相手によって違いはありましたか？

(あった なかった)

\*なぜ、このような違いが出てくるのでしょうか？

\*「援助」「協力」どちらが“いい関係”だと思います？

(「援助」「協力」どちらも同じ)

1 人間関係の場合

2 国際関係の場合

3 人間関係の場合と国際関係を結びつけてみると……

○【モンゴル】の授業の締めくくりです。

前回、〈援助〉と〈協力〉は違うのか？

〈援助（協力）したい〉〈援助（協力）された  
い〉の分かれ目はどこにあるのか？

などを確認しました。

さて、今日は……

○質問その1：

○質問その2：

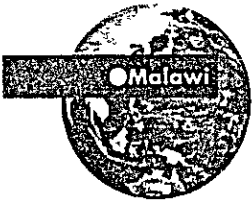
○質問その3：

\*これらの質問は、授業でお話しします。よく聞いてください。

\*グループで考えました。

メンバー…… 3 - ( )

3 - ( ) No ( ) Name



# 国際理解教育の展開

## 自分たちと他の人々

TAKASHI TOMIYAMA

富山 隆志

工業

宮崎県立延岡工業高等学校

### 1 目的

マラウイの歴史、現状と背景、課題について研修旅行にて、現地で見聞したことを正確に伝える。その中で「自分たちと他の人々」、「自分の将来と生き方」について考える機会とする。

具体的には、異文化を学び、自分たちと他の人々との違いを知り、それらを尊重すること、そして「国際協力」の姿をつぶさに学ぶ。これらを通して、勉強することの大切さや、他の人々を尊重する心を育て、21世紀を拓く生徒の育成を目的とする。

### 2 実践の概要

#### (1) 対象生徒

情報技術科	1年生	41名	
同	3年生	41名	合計82名

#### (2) 実施科目

工業英語	2時間	
学校裁量の時間	2時間	合計4時間

#### (3) 展開

##### 1限目

アフリカのイメージアンケートを実施  
(結果は資料1参照)

まずはじめに、生徒がアフリカの開発途上国にどの

ようなイメージを持っているのかを把握する。アンケートは内容を説明しながら、生徒の言葉で書かせるように配慮する。

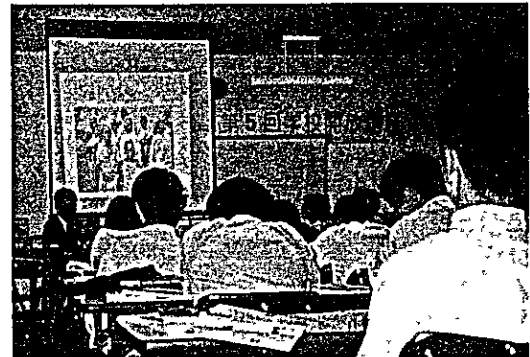
これによってプレゼンテーションの中味を組み立てる。

##### 2限目

#### プレゼンテーション

マラウイの歴史・現状、国際協力事業団（JICA）の役割、青年海外協力隊員の活動を紹介  
テーマは「私たちと他の人々」とする。

内容は「マラウイ国概況」「環境」「現状」「歴史」「豊かさ」と「貧しさ」「国際協力」「隊員の姿」「まとめ」そして生徒へのアンケート、課題として「一番印象に残ったことは」「アクションプラン」の58画面で構成している。（一部紹介、資料2）写真を出来るだけ多く挿入し、マラウイの美しい自然、太陽、光、水、村そ





して人々を表現する。文章は簡潔にまとめ、生徒が飽きずに集中して授業に臨めるように工夫している。写真の説明は音声で入れる。

### 3限目

#### 「21世紀を拓く」アンケートを実施

(結果は資料3)

プレゼンテーション終了後ただちにアンケートを実施する。

- ① 最近の関心とこだわり
- ② マラウイの抱える課題
- ③ 2010年はどんな世界であってほしい
- ④ なぜ勉強するか
- ⑤ 2010年の自分
- ⑥ 印象に残ったことは

単なるアンケートにならないよう工夫している。

### 4限目

#### マラウイのビデオ鑑賞とアクションプランの作成

ビデオ鑑賞後、一人ひとりのアクションプランを考える。その後グループ討議をおこない、アクションプランをまとめる。

質問の内容は、「あなたはアフリカの現状を見聞きし、何をしたいと思いますか。それが出来る出来ないは別として、自分の考えとグループの考えをまとめてください。」である。

- ① 目標と課題
- ② 現状と原因
- ③ やれること
- ④ 質問
- ⑤ 国際理解教育を受ける前と後で気持ちの変化がありましたか。

この結果は次の通りである。

### 3 アクションプラン

生徒は様々な受け止め方をしており、具体的計画も

出てきた。(一部抜粋)

#### ① 目標と課題

- ・砂漠化の防止。
- ・もっと他の世界を知る。直接その場に行くのは難しいのでインターネットで情報を集める。
- ・現地に行き、自分の持っている知識を教えて上げたい。それができないのなら、日本で活動できる範囲で頑張りたい。
- ・電気を引く。太陽電池を普及させる。
- ・医者になり乳幼児を救済したい。子供が生きられるような環境作りに貢献したい。
- ・間接的でも協力できることはいろいろ行う。開発途上国の人の役に立つ仕事を一回はやってみたい。

#### ② 現状と原因

- ・人間が木を切りすぎている。
- ・技術が遅れていて公衆衛生もあまりよくない。
- ・栄養不足と病気。乳幼児の死亡率が高い。色々な病気にかかっている。
- ・経済的に貧しく教育を受けたくても受けることの出来ない子供がいる。
- ・自国で生産することの出来るものが少ないので輸出して外貨をかせぐことが難しい。

#### ③ やれること

- ・木の苗や植物の種を買うための資金を募る。
- ・まわりの人々に途上国の現状を教える。マラウイのことを人に教える。国際貢献しているJICAの活動などについて詳しく知る。
- ・他人に教えてやれるようもっと勉強して自分の技術をもっと伸ばす。

#### ④ 質問

- ・どうして学習レベルが高いのに貧しいのか。
- ・木を植えて砂漠化を防げないのか。どのような気候なのか。
- ・アフリカにどのくらいの植物が今あるのか。アフリカに育つ野菜にはどんなものがあるのか。
- ・他の国は協力してくれるのか。日本以外で先進国は

どういふことをしているのか。

#### ⑤ 国際理解教育を受ける前と後で気持ちの変化がありましたか

- ・自分の持っているアフリカのイメージとだいぶ違っていた。もっとアフリカを知りたいと思った。今はその国だけではなく、全世界の国々が互いに協力、理解することが大切だと思う。
- ・日本がここまで恵まれているとは思わなかった。同じ年代で学校へ行けない人がたくさんいるアフリカの子供達の生活はとても厳しいんだなあと思った。
- ・今までは他の国だから関係ないと思っていたが、自分でもやれることがあると思う。自分も現地に行って自分の目で見てみたい。マラウイだけではなくアフリカの他の国への興味がわいてきた。
- ・今まで「人のために働きたい」と考えてきた「人」とは、すごく恵まれている「人」のことだった。アフリカなど貧しい国々の人のために働くことが、本当に「人のために働く」ことだと思った。

## 4 まとめ

教材を試行錯誤を繰り返しながら作成し実践したが、反省点が多く残った。いま「何のために勉強するのか」という迫力ある問いが我々教師に欠けている。生徒に勉強することの意義をどのように伝えるのか、今回の実践を通じて示唆を得たように思う。アクションプランにあるように生徒は少なからず自分の問題として受け止めてくれた。

事前アンケート、プレゼンテーション、21世紀を拓くと題したアンケート、アクションプランという構成にしたが、生徒のアンケートの反応から、21世紀を拓くための、少なからず明るい展望を見出すことが出来た。

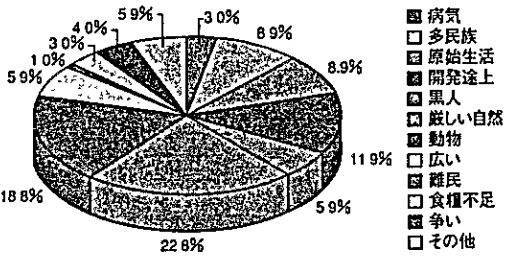
今後、日本の国際化は急速に進むと考えられる。異文化や価値観の違いを柔軟に受け入れ、自分たちと他の人々が共に協力し、助け合いながら地球人としての生き方あり方を考えることが大切であろう。開発途上国の様々な問題解決の糸口もここにあるように思う。21世紀を拓くには、これからの教育のあり方が極めて重要であろう。

資料1

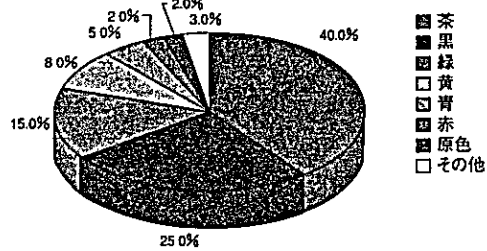
「アフリカのイメージ」アンケート

第1章  
研修成果を生かした授業実践例

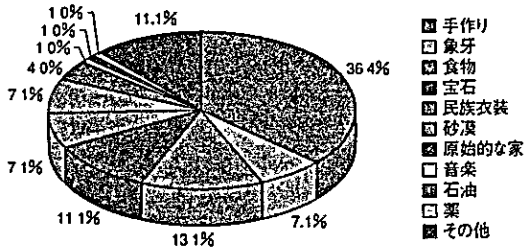
1 どんなイメージ



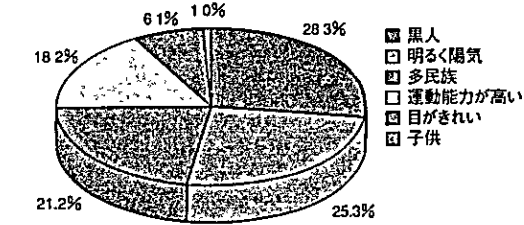
2 色では



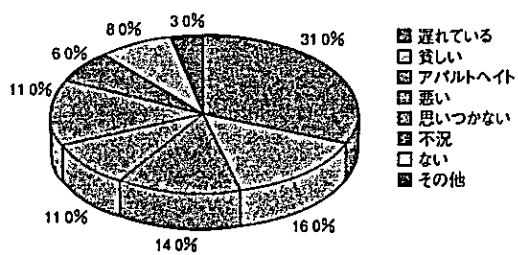
3 物では



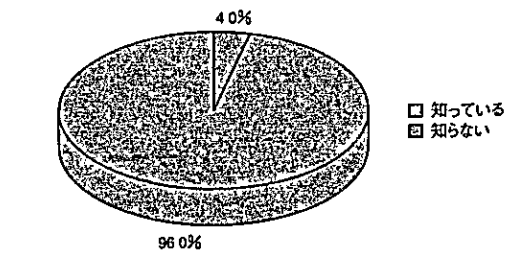
4 人では



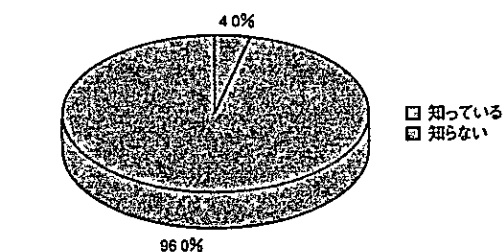
5 政治経済



6 マラウイがどこにあるか知っている



7 JICAを知っている



8 その他 (生徒の意見より)

- ・とても暑い
- ・土でできた家がある
- ・子供が病気で死ぬことが多い
- ・学校が少ない
- ・野生動物がたくさんいる
- ・多くの民族がいる

資料2

プレゼンテーションにて使用した画面 (一部紹介)

「私たち」顔の人々



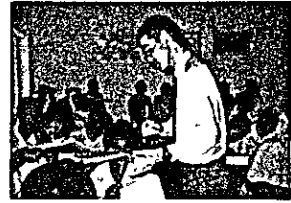
国際協力事業団(JICA)の役割

- 農業の生産力を上げる、農業の改革
- 人口爆発を抑える
- 公衆衛生の普及と徹底、病院と薬の管理
- 道路、通信の普及と整備
- 井戸、灌漑、通信網の整備
- 教育の普及
- 自然保護



この紫色のところです

数学の研究授業を大木隊員



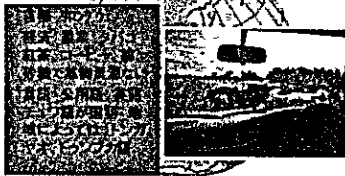
知られる楽園

- 英国の探検家リビングストンがユートピアといった!!!
- The 'Warm Heart of Africa'
- 雄大に広がる自然の美しさ
- 困っている人がいれば、自分がどんなに貧しくても心から親切にしてくれる人々
- サバンナの快適な気候

ロビー住民参加型プロジェクト

- 農業普及で、隊員が農業開発局、国営土地改良指導所に入り住民と働く
- 農業研修、生産、販売までを指導する
- 開発局、国営農業改良所、野菜輸送員、土地改良山内隊員

環境 その2



一番印象に残ったことは

- 原因と影響
- コミュニケーションの相互依存
- ええ、ええ、聞いていよ、買なる点
- 対立
- 協力
- 力の配分

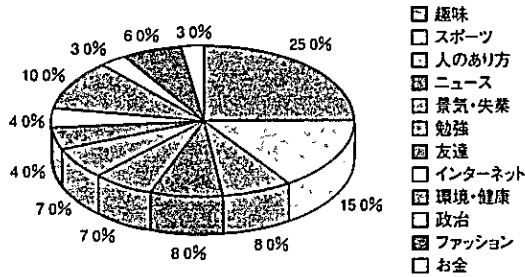
歴史 その3

- 1964年、イギリス共和国として独立、バング大鉄閉
- 1971年、青年海外協力隊派遣開始
- 1992年、駐日マラウイ大使館開設
- 1994年、ルガ大校創設

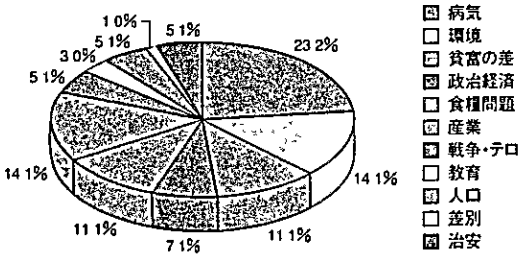


## 「21世紀を拓く」アンケート

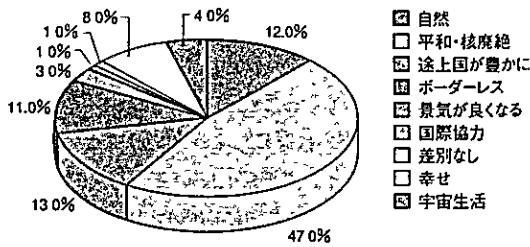
### 1 最近の関心とこだわり



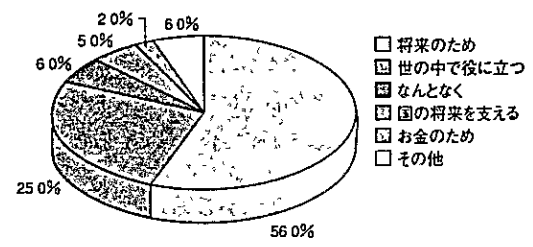
### 2 マウライの抱える課題



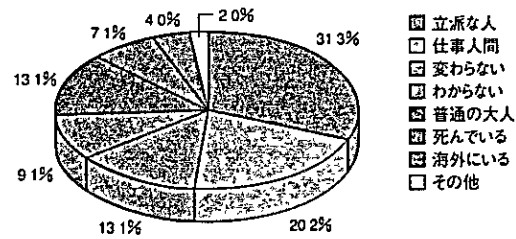
### 3 2010年はどんな世界であってほしい



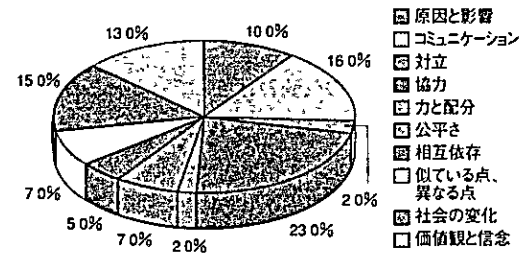
### 4 なぜ勉強するか



### 5 2010年の自分



### 6 一番印象に残ったことは





# 地球的課題の学習で取り組んだ開発教育

## 受験地理の授業を改善する試み



MOTOHISA NISHIO

西尾 源寿

地歴・公民

岐阜県立多治見北高等学校

### 1 はじめに

現在私が勤務している高校は、いわゆる田舎の進学校である。大半の生徒は地元の国立大学への進学を目指しており、地域にもそうした期待が大きい。そのため、カリキュラムや年間計画は、模擬テストや大学入試センター試験などにあわせて作られているといってもよいほどである。

このような中で、開発教育などの特定のテーマについて何時間にもわたって継続的に取り組むことは、教科教育においては勿論のこと、LHRなどの課外活動においても、なかなか困難である。絶対的に時間が足りないのである。特に私の担当している地理Bは、理工系大学志望者による選択科目で、ほとんど全員が大学入試センター試験の受験科目としている。この地理Bを、2年生3年生にわたって5クラス担当しているが、どうしても基礎的事項を講義式になぞるだけにしてしまいがちだ。そうして生み出された時間を、数学や理科の莫大な学習時間に充てたいというのが生徒の本音のところであり、進学指導の成果をあげたいと考えている教師の側の本音でもあろう。

しかし、時間は少ないとはいえ生徒の知識の吸収力は高い。それは、単にセンター試験の準備のために知識を詰め込んでおきたいというだけでなく、世界諸地域のことや地球的諸問題に関して、純粹に関心を持っている生徒が多いからである。将来国際的な場で働く

ことを夢みている生徒もけっこういるのだ。また、センター試験にしても、そうした関心や問題意識を持たなければ得点できないように工夫された問題が多くなってきている。

そこで、今回初めて開発教育に本格的に取り組むにあたって、次の2点に重点を置いてみた。

まず、生徒参加型の授業にしようということである。開発教育は、知識として理解しているだけではなく、生徒自身が開発途上国の問題に主体的に関わっていくような生き方につながるものでなければならない。そのためには与えられた知識ではなく、自ら考えて獲得した英知が必要なのである。

次に、センター試験を意識した普段の授業の流れの中で取り組む授業にしようということである。幸い、高等学校における地理という科目は、文部省の学習指導要領によって様々な学習内容を「2、3の事例によって」学習することになっており、センター試験もそれに従った出題となっている。大学入試のためとはいえ、生徒がすでに詰め込んできた様々な知識を、具体的な事例を扱いながら、開発教育の視点から整理することのできるような授業。……それはやっぱり理想だろうか。

今回開発教育に取り組んだ授業は、それぞれの単元のまとめにあたる授業でもあり、時間数こそ少ないが、生徒にとってはきつといつまでも印象に残る授業になるだろう。

## 2 環境問題を南北問題の視点から考える

地球環境問題は、その国際的取り組みの経緯を見ても、開発教育に最適なテーマといえる。今回の授業は

2年生3クラスで、アマゾンの熱帯雨林の消失、サヘルの砂漠化、ヨーロッパの酸性雨、地球温暖化やオゾン層の破壊、海洋汚染、放射能汚染などの地球環境問題の具体例と、それらの問題に対する国際的な取り組みの経緯を学んだ後に1時間実施したものである。

### (1) 学習指導案 (65分授業)

学習内容	指導方法・学習方法	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>地球環境問題への対策は、南北問題の視点をもって取り組まなければならない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時までに学んだ地球環境問題の事例を復習し、地球温暖化問題を取り上げてその対策を考えさせる。</li> <li>地球温暖化防止条約の二酸化炭素排出権売買制度について説明し、その賛否を問い、簡易的なディベート形式で討論させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>復習にはあまり時間をかけないようにする。</li> <li>内容を資料で説明し、手ささせて、賛成派と反対派に分ける。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>地球環境問題への国際的取り組みの経緯。</li> <li>日本が地球環境問題に対して果たしている役割。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地球サミットから国連人間環境会議まで、順にさかのぼって教科書をまとめながら、開発途上国と先進国が協力する取り組みが進んできたことを説明する。(資料1)</li> <li>日本が地球サミットで環境ODAを提唱したことを強調し、その実例としてメキシコの環境研究研修センターを紹介する。</li> <li>日本の政府開発援助 (ODA) の仕組みや、国際協力事業団 (JICA) の役割などについて説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>悪名高いメキシコ市の大気汚染にもふれながら、スライドを示して説明する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>開発途上国の環境問題と、望ましい国際協力のあり方。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>サン・サルヴァドルの環境問題について説明し、郊外のゴミ埋め立て現場の現状を肯定的にとらえるか否定的にとらえるか考えさせる。</li> <li>ゴミから有用なものを選別して貧民向けの市場で売るというリサイクル業のように、開発途上国の下層市民の多くは、インフォーマルセクターで生活していることを説明し、単純に先進国のような社会資本を整えるだけで問題が解決するわけではないことを理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>首都の風景スライド (写真1) などを示す。</li> <li>ゴミ埋め立て現場で人々がゴミの山に群がっているスライド (写真2) などを示して説明した後、肯定派と否定派に分け、ディベート形式で討論させる。</li> </ul>

#### 資料1 地球環境問題への国際的取り組みの経緯

かつて先進工業国が主導していた環境問題への取り組みは、ローマクラブが提唱した「成長の限界」的な発想に基づいており、ようやく開発途上国としてのナショナリズムが高揚しつつあった「南」の国々にとっては疎遠なものであり得なかった。この南北間の環境問題に対する態度の不一致を克服し、「地球環境問題」として地球規模で国際的に取り組むことが決まったのが、「かけがえのない地球」をスローガンに開催された国連人間環境会議 (1972年、ストックホルム) である。以後、「北」の国々と「南」の国々が協力して地球環境問題に取り組む場として国連環境計画 (本部、ナイロビ) が設置され、1980年代の環境と開発に関する世界委員会での話し合いを通じて「持続可能な開発」という考え方が提案 (1987年) される。そして、それは国連環境開発会議 (地球サミット、1992年、リオデジャネイロ) でさらに具体化され、生物多様性条約や地球温暖化防止条約、アジェンダ21などが示されるに至ったのである。

<教科書・資料集などの要約>

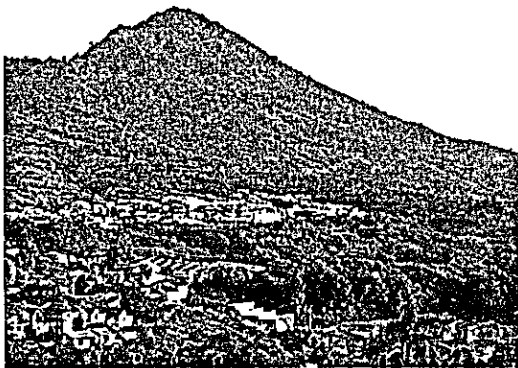


写真1 美しい町並みのサン・サルヴァドル市。  
だが、広域下水が未処理のまま河川に放流されている。



写真2 サン・サルヴァドル市郊外の廃棄物処理場。一切焼却はされてないのでスモークマウンテンにはなり得ないが、ここにバラック状の住み家をかまへゴミあさりで暮らしている人々の頭上を、コンドルのようなカラスが不気味に輪を描いていた。

## (2) 簡易ディベートで出された主な意見

### A. 二酸化炭素排出権売買制度の賛否

反対：先進国が金にものをいわせて、自分たちのだけの繁栄を維持しようとしているようで不公平な感じがする。

賛成：途上国が環境に配慮した開発を進めようとするばお金がかかるのだから、こういう制度で先進国が途上国をサポートすればよい。

反対：こういう制度がなくても先進国は環境に配慮した開発のための援助をすべきだ。今まで先進国は地球温暖化のことを考えないやり方で十分経済発展をしてきた。

賛成：現在の先進国の援助だけでは環境に配慮した開

発を進めるのが困難だからこういう制度を考えただと思う。先進国もこれから自国の二酸化炭素の削減のためにお金がかかるから途上国への援助を増やせといっても無理だ。

### B. サン・サルヴァドル郊外のゴミ埋め立て現場の現状について

否定：途上国の貧困問題を象徴するような光景だ。普通の仕事に就けないのであんな不衛生で危険なことをしているのだろう。最下層の人々の悲惨な生活がわかった。

肯定：途上国の貧しい人達がたくましく生きている様子がうかがえる。子供の笑顔もあって、貧しくても卑屈にならないで明るく生きているなあと思った。

否定：彼らは仕方なしにゴミあさりを仕事としているのであって、貧困の現実を目を背けて虚勢をはっているようにも見える。

肯定：ゴミあさりをしていると言うが、役に立ちそうなものを探してリサイクルする仕事をしているともとらえられる。誇りを持って働いてもらっていると思う。

否定：ゴミがきちんと分別もされずどんどん埋め立てられていったら、有害物質も出てくるだろうし埋め立てをする土地も足らなくなってくる。先進国が協力して日本のようにゴミの分別回収をすすめたり、環境を考えた処分場を作るべきである。

肯定：分別回収が徹底するとは思えないし処分場を作る資金もないだろう。それより現実にこのゴミをリサイクルして暮らしている人がいるのだから、彼らに分別や処分をやってもらうようにすればいいのではないか。

## 3 開発途上国の人口問題から国際協力を考える

経済協力開発機構（OECD）の開発援助委員会（DAC）が掲げた「新開発戦略」では、環境分野と並んで、貧困・教育・保健医療の各分野で、「人間中心の開発」を進めることがうたわれている。これら各分野の目標が達成されれば、きっと開発途上国の人口問題も解決できるだろう。世界人口の推移、開発途上国



の人口問題（インド・中国）について学んだ後に、2年生3クラスで実施したこの授業は、開発途上国の人口問題の解決策を探っていく中で、国際協力の理念や

望ましいあり方、特に「開発と女性」（WID）に関して、生徒の興味・関心を喚起し、正しい認識を育てることをねらいとしている。

## (1) 学習指導案（65分授業）

学習内容	指導方法・学習方法	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>開発途上国の人口問題の本質は貧困問題（南北問題）である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インドと中国の人口問題の復習を通じて、開発途上国の人口爆発が何故問題なのか、どんな対策がとられてきたのか、考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口増加策を採っている開発途上国との違いを参考に。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>開発途上国の人口問題の解決のためには教育・保健・医療・雇用などのベーシックヒューマンニーズ(BHN)を満たす必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口増加率のめざましい低下がまだ見られないインドと同様に、人口抑制を目指しながらも依然として人口増加率が高いままのメキシコについて、人口問題（貧困）の実態を実感として理解させる。</li> <li>メキシコの人口問題を解決し、貧困を克服していくためには何をすればよいか。具体的な9項目の案について、最も現実的で有効と考えられるものの順にランキングしながら、開発途上国の人口問題の原因と対策について考えさせる。（資料2）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>メキシコシティのスラム（写真3）や農村で遊ぶ多くの子供たち、町中で働いている子供たち（写真4）などのスライドを示す。</li> <li>メキシコの人口増加率、識字率、失業率などのデータを示す。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>開発途上国の人口問題に対する対策のうち、日本人として貢献できることは、「人間中心の開発」を進めるための「顔の見える援助」である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口問題の対策として、近年注目を集めている「開発と女性」（WID）の考え方の有効性を考えさせる。</li> <li>WIDとしての意味をもっているとも考えられる日本の国際協力の例として、メキシコのイタルゴ州ピノスアレス村の青年海外協力隊員、竹下美奈子さんの活動現場の様子を紹介し、彼女の活動が村の経済的發展や識字率の向上にまで貢献していることを理解させる。</li> <li>青年海外協力隊に関心を持たせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口爆発の直接的原因である高出生率は女性の犠牲の上に成り立っていることに気づかせる。</li> <li>竹下隊員の活動現場のスライド（写真5）などを示したり工場で作られた製品</li> </ul>



写真3 メキシコシティのスラム。農村から押し出されるように大都市に流れ込んだ人々は、郊外の空き地にこのような仮住まいを建てて暮らしている。

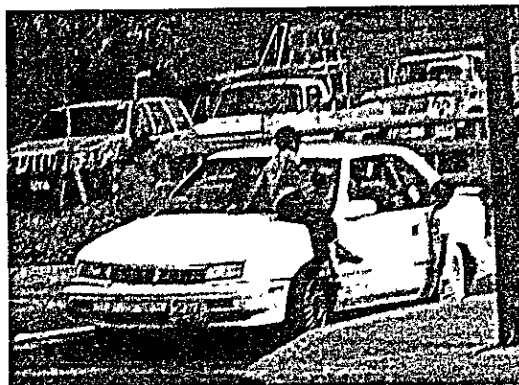


写真4 交差点で止まった車の窓ガラスを拭き、生活費をかせいでいる子供たち。



写真5 縫製工場での技術指導の任務について説明してくれた竹下美奈子隊員

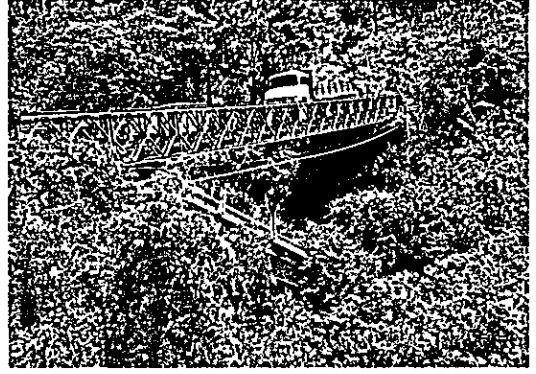


写真6 エル・サルヴァドル内戦の傷跡。壊されたままの橋に仮設橋が架けられている。

## (2) メキシコの人口問題対策案のランキング

このランキングは、メキシコの人口問題に対する対策として掲げた9項目の案について、どの案が最も現実的で有効か、次のような方法で生徒に考えさせるものである。

- A. 生徒が各自の考えに従って、現実的で有効な対策案だと思う順に1位2位3位まで投票する。
- B. クラス全員の票を開票して、1位に3点、2位に2点、3位に1点という得点を与えて黒板に学級委員選挙のように書き出して集計する。

- C. こうしてできたクラスとして最も有効で現実的と考えた対策案の1位2位3位を、その順序の通り投票した生徒に、どうしてそう考えたのか発表させ、その他の生徒にも意見を述べさせる。

## 4 南北問題=貧困に対してできること

この授業は、日本と世界諸地域との関係という単元で、日本が欧米先進国との間に貿易摩擦問題を抱かえ

### 資料2 メキシコの人口問題、9項目の対策

社会保障制度を充実させ、親が働けなくなったときに子供に頼らなくて暮らせるようにする。

法律によって一定年齢以上しか結婚できないような規制を作って晩婚を勧める。

教育を充実させ、家族計画の必要性や避妊の方法を、貧しい人々にも理解させるようにする。

保健・医療制度を充実させ、少なく生んだ子供でも死なせずに育てることができるようにする。

家計を支える仕事に子供が就くことを法律で厳しく禁じ、子供を多く産んで働き手にさせようとする考え方を断つ。

法律によって家族内での子供を産む女性の地位を向上させ、生む・生まないの決定権を女性に与える。

出産と育児以外に、女性が働ける職場や仕事を開発して、女性の経済面での地位を向上させる。

貧しい人々の生活を、社会保障によって豊かにする代わりに、避妊手術をほどこす。

夫婦で生むことのできる子供の数を法律で制限し、避妊具の無償配布と違反に対する罰則の制度を作る。

てそれにどう対応してきたかを学んだ後、教科書の流れに沿って行う最後の授業として3年生2クラスに実施したものである。先進国と開発途上国との間に横たわっている南北問題の構造や、さらに問題の本質である途上国内の貧困の構造を理解した上で、日本がどの

ような役割を世界の中で果たすべきか考えさせた。当然、日本のODAやJICAの活動、NGOの活動などについても直接紹介した。生徒たちが、将来何らかの形でこうした方面の活動に参加してくれることを願いつつ……。

## (1) 学習指導案 (65分授業)

学習内容	指導方法・学習方法	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>南北問題の構造は国際レベル、国内レベル、家族レベルにおける貧困の悪循環である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際レベル、国内レベル、家庭レベルそれぞれにおける貧困の悪循環のモデルについて項目のみ示し、循環になるように考えさせる。</li> <li>各レベルの項目について、代表者に黒板で循環の図を完成させ、説明させる。(資料3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各項目をマグネットで黒板に貼れるようにした紙に書いておく。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>南北問題の克服のためには、国際協力が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>エル・サルヴァドルの現代史・地誌から、各レベルでの貧困の悪循環の実例を、生徒に実感できるように説明する。(特に、1932年のF.マルティの反政府運動が、社会主義や少数民族の自覚という面を持っていたことを解説)</li> <li>貧困の悪循環を断ち切るために、日本人として何ができるか、考えさせる。</li> <li>日本も援助を受けて成長したことを説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>エル・サルヴァドル内戦の傷跡のスライド(写真6)や、急斜面に拓かれたトウモロコシ畑のスライドなどの映像資料、各種統計資料を示す。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>日本は、ODA、JICAの活動、NGOの活動などを通じて南北問題・貧困の問題の克服のために貢献している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アルプスを越える3人の少年のエピソード(JICA刊「いま私たちにできること」P36)や、国際経済における有効需要の理論、現場の人たちの心のふれ合いのエピソードなどから国際協力の理念を理解させる。</li> <li>日本のODAの特徴(総額で世界1位、国民一人当たりになると北欧よりかなり低い、グラントエレメントも高くないなど)を国際的な比較から説明し、JICAの役割の重要性と活動内容の意義を理解させる。</li> <li>卒業記念にNGOを含めた国際協力団体、機関の連絡先などのリスト(JICA刊「ACCESS国際協力」誌の巻末)のコピーを配布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既に学習した地球環境問題、人口問題にもふれ、国際協力が人類の課題の克服に不可欠なことを強調する。</li> <li>いままでの日本のODA批判に関して、展望を示す。</li> <li>リスト中のJICAの国際協力事業は、エル・サルヴァドルの実例を紹介する。</li> </ul>

### 資料3 貧困の悪循環のモデル

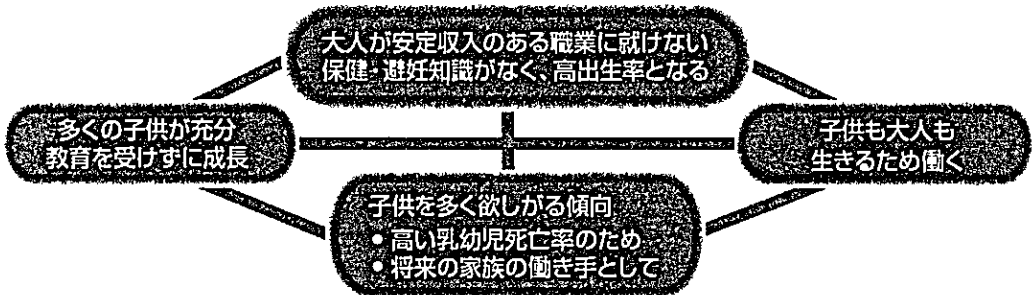
#### 〈国際レベル〉



〈国内レベル〉



〈家庭レベル〉



4 おわりに

実は、この高校教師海外研修に応募するにあたって一番躊躇したのは、参加申込書にあった「研修で得た経験を授業またはクラブ活動に実践した報告書を提出していただきます。」という一文を読んだ時である。授業時間内にどんどん受験対策の問題演習をやらせる（やらざるをえなかった）ほどの今までの授業形態の中で、突然腰をすえたテーマ学習にチャレンジしたら、よほど生徒にとっておもしろい授業にするか、いっそ受験にも生かせる授業にするしかない。そんなことができるだろうか……？

実際に参加できることが決まって、この不安は、ますます重くのしかかってきた。しかし、素晴らしいメンバーと楽しく充実して過ごした中米での10日間は、私の不安を新たな意欲に変えてくれた。おもしろくて、なおかつ受験にも生かせる授業を工夫してみよう！

よく調べてみると、今まで知識として詰め込ませるだけだった地理Bという科目の学習内容のなかに、開発教育や国際理解教育に直接結びつく分野がいっぱい

ある。とくに、近年センター試験でもしばしば出題されるようになってきた地球環境問題・民族問題・南北問題などの分野については、今回のメキシコ、エル・サルヴァドルの旅の中で、単なる教科書的な知識としてではなく、人類が共有しなければならない問題として実感することができた。これを今回の研修の成果と結びつけた授業にすればいい。

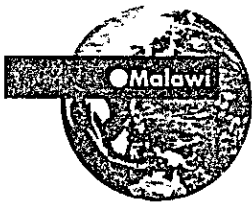
取り組みはじめてみるとそれなりに楽しい経験であった。地理という教科の学習内容の意味も、以前にくらべてより深く理解することができるようになった。そして、何より今回の授業実践を通して生徒が受験のためだけでなく本当に興味を持って授業に参加するということが、いかに楽しいことか知ることができたことである。この経験は、私の教師としての生き方を一から見直すきっかけになったともいえる。

今回の高校教師海外研修で得た収穫は、研修自体で得たものはいうまでもないが、学校に戻って悩みながらそれを生徒に伝えたことも、私にとってかけがえのないものとなった。

第2章

研修レポート





# ありがとう ジコモ、マラウイ!!



TOMOKO ETO  
衛藤 朋子

英語

大分県立大分商業高等学校

## 1 はじめに

成田からロンドンまで12時間、さらにロンドンから12時間、やっとのことでマラウイに到着した。すぐに国際協力事業団（JICA）マラウイ事務所へ向かった。その部屋にはマラウイで働いている協力隊員のリストが掲示されていた。そのリストを目にした時、長旅の疲れをすっかり忘れてしまった。マラウイでは77名もの日本人が自分の専門分野を生かして協力活動をしている。こうした方々を前にして、自分の無力さを感じた。私ができることは、マラウイの現状とそこで協力活動している人々の姿を伝えることである。改めてこの研修で自分に与えられた役割を実感した。マラウイ研修第一日目、私は五感のアンテナをピンと張った。マラウイについて少しでも多くのことを吸収したいと思った。

## 2 マラウイの自然

### (1) カスング国立公園

ここは国立公園として保護されている。この公園には様々な野生動物が生息しているらしい。ジープで野生動物を見に行った。早朝と夜と合わせて6時間ものドライブでほんの数種類の動物しか見ることができなかった。ここは動物園ではないので簡単にその姿を現してくれないし、じっとしてくれるわけでもない。私たちは始終キョロキョロしていた。ガイドが動物を見つけたと言うと、私たちは息をひそめてその一点に注

目した。特にクドウが草原を走り抜けていく姿は美しく勇壮だった。ここでは密猟が多いのと7年前の旱魃が原因で、動物が激減しているらしい。マラウイの人々が、日本の狭い檻に入った動物を見たらどんなふうを感じるのだろうか、ふと思った。

### (2) チンテシ（マラウイ湖）

マラウイ湖から昇る太陽は真っ赤な色をしている。アフリカの太陽は特に赤いという話を聞いたことがあるが、本当かもしれない。太陽が少しずつ丸くて大きな顔を出すと、スーッとマラウイ湖に一筋の赤い道ができる。その上を歩いて太陽のそばまで行けそうだった。（写真1）この辺りに住む村人たちはこの朝日とともに漁から戻ってきた舟を迎え、収穫を分けてもらっていた。マラウイ湖の朝は美しく、活気があった。

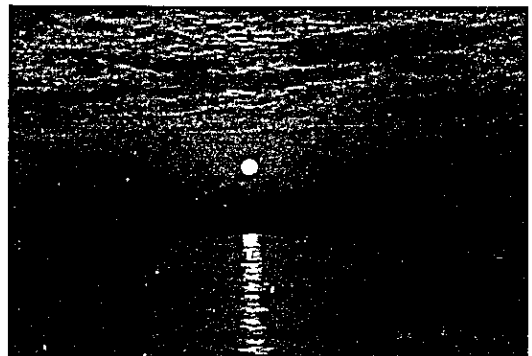


写真1「マラウイ湖に昇る朝日」

### 3 マラウイの保健と医療

#### (1) 保健省カスング病院

この病院では吉田隊員が薬剤師として働いている。とても生き生きと、仕事をしている様子が印象的だった。小児科の病室に入ると子供たちがうつろな目をして横たわっていた。そのベッドにはシーツはなく、青いビニールシートが敷かれていた。私たちが訪問した時には一人に一つのベッドが当てられていたが、雨季になるとマラリアの患者でベッドが足りなくなり、一つのベッドを3人で使わなければならなくなるそうだ。産科を訪れると心暖まる光景に出会った。新しい命とその母親たちがベッドをうめていた。母親は愛しそうに赤ちゃんを抱いて、私が近づくと恥ずかしそうに笑って、赤ちゃんを見せてくれた。(写真2) この暖かい光景は地球上どこでも同じだろう。最後に、吉田隊員が管理している薬剤の保管倉庫へ案内してもらった。中は薄暗く、冷房がないので夏は蒸し風呂のようになるらしい。吉田隊員の話によると、必要な薬が不足するのは珍しくなく、薬がないよりはいいと、期限が切れても6ヵ月までなら使うこともあるそうだ。そうした状況で、吉田隊員はきっと何度もつらい思いを経験しているのではないだろうか。

#### (2) 保健省コミュニティ・ヘルス・サイエンスユニット

マラウイでは、下痢、マラリア、呼吸器感染症など、予防や治療が可能な病気で多くの子供が亡くなっている。同じ地球に生まれて助かる子供と助からない子供

がいるという現実を目の当たりにして、本当にやるせない気持ちになってしまった。このような事態への対策として、この機関では、様々な保健活動や保健教育を行っている。しかし、この活動を運営したり引き継いでいく有能な現地の人材が不足していること、各組織の管理がしっかりできていないこと、電気、道路、通信の状態が劣悪なこと等の問題が絡み合って、その活動には苦勞が絶えないようだ。

### 4 マラウイの教育

#### (1) 国立リビングストーンニア・セカンダリースクール

およそ100年前に創立された教会系の学校を訪問した。(写真3) 教会系だからか、建物やその雰囲気は何となく厳かな感じがした。この学校は、標高1500mくらいの場所にあり、下の方に見える風景は豆つぶほどだ。マラウイの学校のほとんどは全寮制なので通う必要がないのだが、もしこれを通わなくてはならないならば、毎日が登山である。ここで数学を教えているのが三輪隊員である。三輪隊員はこの学校の敷地内に住んでいて、この山を下りることはめったにないそうだ。病気の時は大変だろうと思う。教室を覗くと窓にはガラスがついていて、机と椅子が並んでいた。私たちから見れば当たり前の光景だがマラウイではこうした学校は珍しいそうだ。窓ガラスにするとガラスは盗まれるので(売るとお金になる)、始めからつけないか、盗まれてなくなったままの学校が多いそうだ。この学校はモラルがしっかり保たれているようだ。これは、



写真2「新しい命」



写真3「リビングストーンニア・セカンダリースクール校舎」

ここが教会系の学校なのと、近くに教会があることが影響しているらしい。マラウイでは、キリスト教が社会の道徳教育を担っている部分があるからだ。

## (2) 私立ブエジ・セカンダリースクール

ここはマラウイ大学への合格者を数多く出しているレベルの高い学校である。マラウイ大学はマラウイ一の大学で、ここに入れば将来のエリートコースを約束されたことになる。一つ興味深いシステムがあった。共学なのだが、男子と女子を別々に教育している。男子と女子を同じ教室で学ばせると成績が落ちてしまうのだという。この学校では、大木隊員が数学を教えている。ある女子クラスで大木隊員の数学の授業を見学した。授業では、前の時間の復習、大事なところは繰り返す、できるだけ簡単に新しい内容を説明するというような生徒への細かい配慮が見られた。生徒たちは、ノートを取りながら、熱心に大木隊員の説明を聞いていた。(写真4) マラウイでは、校長次第で学校が良くもなるし、悪くもなるらしい。この学校の校長は優れた方のように、教育にも、経営にも熱心に取り組み、よい成果をあげているようだ。校長に意欲や能力がないと、その学校の質が落ちていく。そしてその学校は荒れていく。質の悪い学校には、質の悪い先生が集まってくる傾向にあるようで、全く悪循環である。

## (3) 国立エウシニ・セカンダリースクール

この学校を訪問すると、校長先生と生徒たちが講堂で歓迎集会を催してくれた。そこでは、生徒たちから日本についての質問を受けた。日本の生徒はマラウイ



写真4 「ブエジ・セカンダリースクールでの数学の授業」

がどこにあるかさえ知らないのに、生徒たちは日本のことをよく知っていた。質問を聞いているとマラウイという異文化から、日本がどのように見えるかがうかがえて面白く感じた。「日本ではどうして科学等、理系分野を勉強する人が多いのか？」という質問が多かった。マラウイの生徒がよく目にする日本の物や出会う日本人は、自動車や理数系の先生である。そういう疑問が出てくるのも不思議ではない。中に素朴でかつ深く考えさせられた質問があった。「日本はあんなに狭く、人口が多いのに一体どこで食物を作っているのか？」頭をガツンとやられたような気がした。私たち日本人は今や食物に不自由することはない。むしろ飽食とさえいわれているくらいである。しかし、そのほとんどを輸入に頼っているのが現実である。日本がとても貧しく感じた。日本は他の国なしには生きてはいけないだろう。そうした状況を考えると、この世界の中で生きていくために、他の国について学び、他の国に対して日本ができることを考えていくのはとても重要なことではないだろうか。一つ興味深い光景に気づいた。マラウイの生徒たちは、騒がしくなると生徒同士で静かにさせあう。所々から「シーッ」という声が響く。日本では先生が怒鳴って静かにさせる。マラウイの子供たちの方が学ぶ意欲が旺盛なのかもしれない。この違いはどこからくるのだろうかと思っただ。校内を歩いていると、一人の女生徒から「文通してほしい」と声をかけられた。マラウイでは娯楽と呼べるものが少ないらしく、文通が流行っているらしい。

## (4) 国立マガワ・セカンダリースクール (男子校)

校内を案内してもらった。空き家かと思えば、なんと寮であった。(写真5) そう思わせるほどさびれていた。教室の窓にはガラスはない。机も椅子もない教室がほとんどだ。このような学校がマラウイでは普通だそう。この学校は、色々問題を抱えていた。近くに飲み屋が並んでいて、学生はそこで酒を飲んだり麻薬を買ったりする。時に暴力事件も起こるらしい。また教師も授業をさぼることがあるらしく、その間生徒はぶらぶらしているか2クラス(約80人)一緒に授業を受けなければならない。このような環境で数学を教



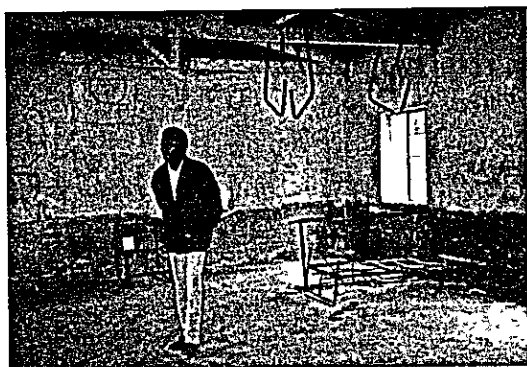


写真5「マガワ スクール学生寮」

えているのが、青木隊員である。この時学校は休暇に入っていたのだが、青木隊員は生徒の卒業試験のための補習をしていた。生徒は青木隊員にずっといてほしいと言っていた。青木隊員はこの学校でとても親しまれていて、なくてはならない存在のようだ。他の学校にも共通することだが、青木隊員のように日本人が理数科目を教えるようになって確かに生徒の力はついたそうである。

## 5 マラウイの水

### (1) エウシニ近くの井戸掘り現場

ある小さな村の近くで、井戸掘りの現場を見学させてもらった。日本では水があるのが当たり前である。この当たり前のなかでは、その大切さになかなか気づかない。私もそのうちの一人であったのだが、この井戸から吹き上がる水を見て、命をつなぐ水の大切さを強く感じた。(写真6) この水は近くに住む村人の生活をかなり楽にすることができる。こうした井戸掘りの作業が行なわれているのは、この場所だけではない。2年間で、およそ300位の井戸を掘りあてる計画をしているそうだ。2日に1つというペースである。しかし水が出る確率は60%だという。この場で見ているだけの自分に、無力感を感じてしまった。同時にこうした場で活躍している日本人を誇りに思った。この井戸掘り現場を少し奥へ入るとこの村に住む人々や畑を目にすることができた。子供たちのお腹は栄養が不足なのか膨れていた。また学校に通っているようでもなかった。畑も整備されておらず、勝手に生えているとい

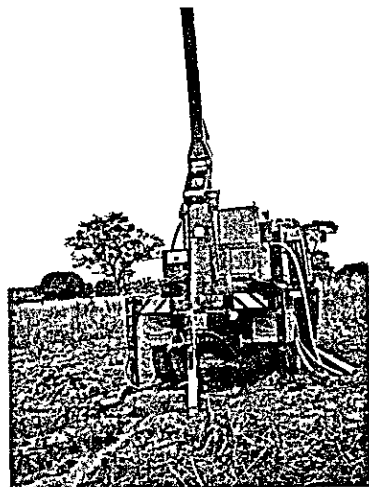


写真6「井戸掘り現場」



写真7「村の子供たち」

う感じだった。私はその様子を見て、水以外の援助はしないのだろうかと思に疑問に思った。JICA職員の方が次のように答えてくださった。「私たちの価値観でこの村をはかれば『あれがない、これがない』といったかわいそうに感じるかもしれないが、この村にはこの村の生活があって今の暮らしを変える必要はない。命に関わるものや人々の自立を助けるものに対して援助や協力をしていくのが一番なんです。」確かに、人々の笑顔には私たちが持っていないような豊かさがにじみ出ているような気がした。(写真7) 一方的な価値観からの援助や協力はかえって人々の暮らしを壊してしまうのかもしれない。何をどうやって援助や協力をしていくのか見極めるのは本当に難しいと思った。援助や協力の在り方について考えさせられた。

## 6 マラウイの地方行政

### (1) ムズズ市役所

ムズズ市には市長がいない。選挙をするお金がないという。この国の問題点として、地方における行政機構が弱体であり何事も中央集権的に進められ能率が悪いことと、人材の中堅層が薄く現場が弱いということがあげられているが、ムズズ市もその問題を抱える一市であるように思える。森下隊員は道路・電気機械課長として、この町の市役所で働いている。森下隊員が、最も苦勞していることは、職員の汚職と仕事に対する責任感とやる気のなさだという。何か公共事業を行う場合、組織の中で仕事の役割分担がされているのが普通だが、ここでは森下隊員が計画、設計、現場の監督と指導など、一人でなくてはならない状況がほとんどという。つまり、各段階でリーダー的人材が的確な指示を出していなかったり、責任感とやる気のなさから仕事をいいかげんにしてしまうので、森下隊員は目が離せず、時に自ら手を加えざるをえないのだ。市役所を出て、森下隊員が手懸けた側溝を見せてもらった。(写真8) この側溝がないと、雨季に激しい雨が道路にでこぼこを作り道路が穴ぼこだらけになる。また、行き場のない水が家を襲うのだ。この側溝に助けられている人々は大勢いるはずである。森下隊員は「きれいな道路をありがとう」と住民に言われたことがあるそうだ。また森下隊員は、町の美しさを保つことにも貢献した。この町には、中央分離線にジャカラントの木々を植えている道路がある。春になると紫色の美しい花でいっぱいになるという。日本の桜のようなもの

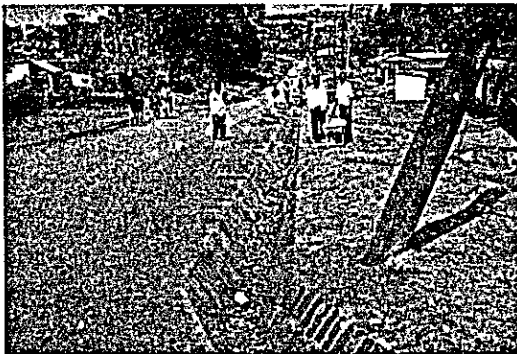


写真8「ムズズ市道路の側溝」

である。その木々を切ろうという話もちあがった。森下隊員は必死に止めたそうだ。確かに道路に木々は邪魔だと感ずる人々もいるだろうが、花の美しさを喜ぶ市民も観光客も大勢いるのではないだろうか。森下隊員が止めたおかげで、毎年春になるとジャカラントの花で満開になる。

## 7 マラウイの農業

### (1) リロンゲ郊外農村地域農業普及協力活動現場

マラウイ経済は国内総生産の40%を農業が占めており、輸出による収入の90%近くを農産物に依存している。マラウイは典型的な農業立国である。そんなマラウイに貢献しているのが、果樹の奈良部隊員、野菜の丹波隊員、土壌肥料の山内隊員である。彼らはこの農村でマラウイにあるもので工夫しながら、効率的な農業を行う方法と技術を現地の人々に指導している。単に資金を与えるとか、設備を整えるだけではその一時期は潤うだろうが、後に続いていかない。例えば、メイズ(マラウイ人の主食でトウモロコシの一種)の茎や葉をねかせたものが肥料になる。(写真9) また、水をよく吸収できるように土の上にビニールを敷くという工夫も見られた。ちょっとした工夫なのだがそれが作物のでき具合に大きく影響することを知って、農業の奥深さを実感した。しかしながら、彼らの指導がいつも受け入れられるとは限らない。現地の人々のニーズに合わなかったり、お金の結びつかなければ受け入れられないし、後にも引き継がれない。ゆえに、常に



写真9「肥料を使った野菜と使っていない野菜」



写真10「リロンゲ郊外農村の畑」

その自然環境と人々の生活や慣習にあったやり方を開発し指導していかなければならない。試行錯誤の毎日を過ごしているのではないだろうか。彼らの指導の下農業を行っている村を訪れた。村の女性たちが歓迎の歌を歌ってくれた。マラウイの人々の飾り気のない温かさを感じた。畑は背々とした野菜でいっぱいだった。(写真10) もっと畑を広げたいそうだが、水が足りないそう。確かにこの畑には一つの井戸しかなかった。また収穫された作物を売りに出せるように流通経路を整えていくことも今後の課題であるようだった。様々な問題や課題を抱えているにしても、広大で肥沃な大地に大きく育っている作物を見ていると、日本に比べてマラウイがとても豊かな国に思えた。

を知ってチェワ語の練習さえ始めるようになった。マラウイの人々は、温厚でそのペースは非常にゆっくりだと聞いてはいたが、この出来事でそのことをさらに理解できた。私たちには、笑い話になるが、一緒に仕事をする人たちは大変だろうと思わせる出来事でもあった。振り返ってみるとマラウイ研修で今まで自分が知らなかった世界を体験することができた。そして机上では決して得られない多くのことを学ぶことができた。10日前、私にとってマラウイは遥か遠い国だったのだが、今では遠いながらも近い国と考えるようになった。私のように一人でも多くの人々が遠い国に近い国と感じられるように伝えていくこと、それが私の役割であろう。そうした思いを胸にマラウイを後にした。

## 8 終わりに

リロンゲ空港は、日本の援助によって建てられたそうである。この空港から、私たちは帰路に着く。最後の最後で、信じられないことが起こった。なんと出国審査を行う役人がチェワ語講座を始めたのだ。チェワ語で挨拶ができないと通してもらえないから、驚いた。私の前に並んでいた人たちは、その役人の前で数回やり直しをさせられ、うまく言えるまでそこを通してもらえなかった。厳正であるべきこのカウンターでこのようなことがありえるのかと不思議に思った。後に長い列ができつつあった。皆がイライラし始めた。しかしそんなことはおかまいなし。私の番がくると、案の定「ムリブワンジ」とチェワ語で挨拶してきた。私も数回やり直しさせられた。後の列の人たちがこの様子



# メキシコ、エル・サルヴァドルを吹く風

MAKIMI NARUSE  
成瀬 牧己

国語  
愛知県立春日井南高等学校

## 1 はじめに

勤務校の愛知県立春日井南高等学校生徒会は5年ほど前から中米「グアテマラ」へ援助活動を行っている。その活動では青年海外協力隊員が申請する「小さなハートプロジェクト」に協力するという手法を取ってきた。ところが生徒会担当者である私自身、グアテマラを含めた中米に知識が乏しい。

幸い、今回の「高校教師海外研修」はグアテマラを南北に挟む、メキシコとエル・サルヴァドルが対象国になっていた。この研修を機会に中米の知識や情報を増やし、本校生徒会の海外援助活動の活性化をめざした。

## 2 東京研修

### — 事前研修 —

「事前研修」というには、その内容が充実していて、学ぶ点が多かった。全国の多様な学校現場で開発教育に携わっている先生方からその実践をうかがえる、またとない機会だった。

特に、「グループミーティング」では、特別活動を柱とした開発教育への取り組みという点で、意見を共有でき、ここで学んだことは学校現場に戻っても生かされている。また、「開発教育ワークショップ」で学んださまざまな生徒へのアプローチも、今



写真1 休憩時間にも講師に質問を投げかけていた

後ロングホームルーム運営などに活用させていきたい。(写真1)

## 3 メキシコ、光と闇

アトランタで乗り換えた飛行機がメキシコ国際空港に到着したのは、夜9時半過ぎだった。半日以上移動で疲労困憊の我々にとって、国際協力事業団(JICA)現地事務所の方の出迎えは心強かった。だが、市内へ向かう途中、日本人旅行者が数日前タクシー強盗に襲われたことや、警官と日本人旅行者がひどい目にあっただことなど生々しい話を聞いた。こ

の種の事件はメキシコだけではない。日本でも起きるものだが、到着したばかりで、ショックは大きかった。

バスの前に広がる闇の中にそんな事件が隠されていると思うと、見えない強い力を感じた。(写真2)

メキシコシティーは標高2千メートルを越える高地にあり、その日差しは明るく強い。早朝涼しい空気の中、ホテルを抜け出し、近くの屋台でトルティージャをほおばる。その味に慣れないものの、辛みを加えるチリがすぐ気に入り、たっぷり足す。言葉が使えない東洋人の私に、屋台のおじさんお婆さんは釣り銭も正確に手渡してくれた。だまされるのではないかと用心ばかりしていた自分が恥ずかしかった。

イダルゴ州ピノスアレス縫製工場の人々も優しかった。予定より3時間も到着の遅れた我々を、仕事が終わった工場で待っていてくれた。広場ではこの村の子供たちが、サッカー強国メキシコの末裔であることを誇示するように、明るい日差しの下、元気よくボールを蹴り続けていた。

強い日差しは濃い影を作る。夜のメキシコシティーを歩くと、物乞いをする大勢の子供たちに手を差し出される。娼婦、用心棒、スリ。夜だけではない、日中

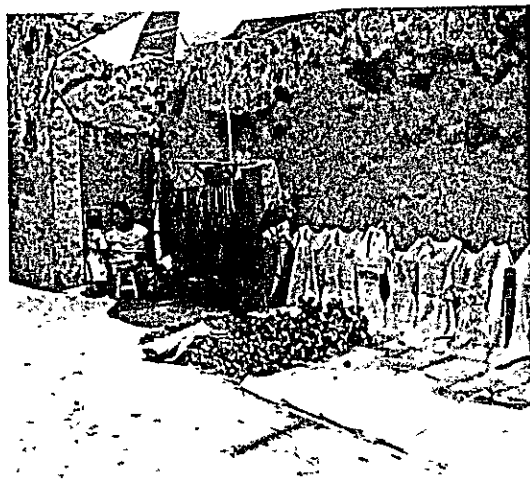


写真3 土産物を露店で売っているインディヘナ(先住民)

も市内を走る列車は乗らないほうがいいといわれた。警官たちも安心できない。

そうした現実の背後には「貧困」が存在する。ごくわずかな裕福層と圧倒的多数の貧困層。その両者を分かつ絶望的な隔たり。さらにそれは少数の白人、多数のメスティーソ(混血の人々)、そしてインディヘナといわれる先住民たちの民族問題と対応している。メキシコの闇は深い。(写真3)

## 4 共に生きるというコミュニケーション

— 活動現場を見て —

「環境研究研修センタープロジェクト」はメキシコ市の大気汚染を監視するシステムに取り組んでいる。すでにこのプロジェクトはメキシコ側からも高く評価され、メキシコ政府も積極的な姿勢を示しているという。一般に援助活動は困難がつきまとうといわれるが、なぜ順調に進んだのか、素朴な質問をした。

「コミュニケーションがうまくいっているんです。」というのがチームリーダー細野専門家の答えだった。単純なようだが、大切に難しいことだ。

「日本メキシコ学院」は幼稚園から高等部まである

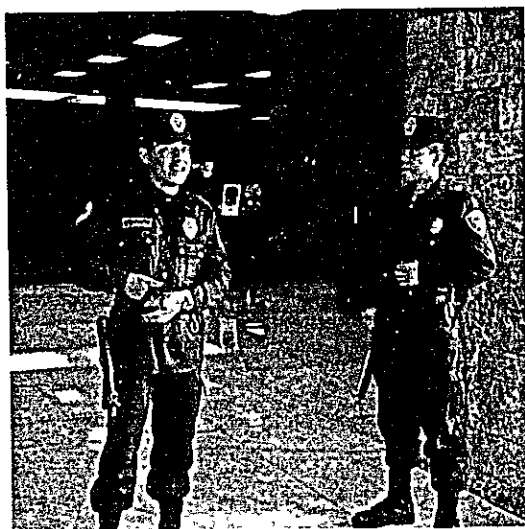


写真2 主要な建物では武装したガードマンが必ず出入りをチェックしている

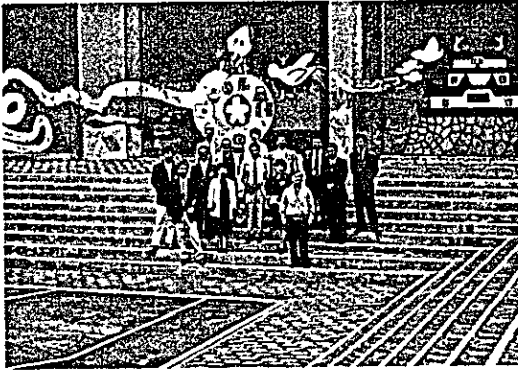


写真4 中庭には、日本の象徴「城」とメキシコの象徴「ピラミッド」がこの学校で結びついていることを示す壁画が描かれている。



写真5 赴任して間もない頃だったが、工場では人々の信頼をすでに得ていた。

大きな学校だ。特に小学校と中学校には、日本の文部省の学習指導要領に準ずる「日本コース」と、メキシコのそれに準ずる「メキシココース」の両方がある。教育は国家の基盤だ。こうした教育システムを採るにはメキシコ側に日本の教育に対する十分な理解がないと実施できない。理解した上で、自国の教育制度とは別のシステムを認めたのだろう。この学校は、国家という枠組みを超える新しい教育を実践しているともいえる。(写真4)

そしていちばん印象的だったのは青年海外協力隊員の活動だった。イダルゴ州ピノスアレス縫製工場で働いている竹下隊員。姿は紛れもない日本人だが、村の

人たちの中にすっかり溶け込んでいた。工場で作られる製品の販路で問題を抱えているという。問題の解決もまた、工場で働くこの村の人々と話し合っている。この村に住み、村人と同じものを食べ、生活する。言葉だけのやりとりではない、本当のコミュニケーションというものが存在する場所。そんな具体例を見た思いだった。(写真5)

## 5 ゴミ捨て場の救世主

— エル・サルヴァドル —

エル・サルヴァドルという聞き慣れない国が次の訪問先だった。メキシコの南、グアテマラの、さらに南にエル・サルヴァドルは位置する。太平洋に面し、四国と淡路島を足したほどの面積を持つこの国は、6年前まで内戦が続いていた。

明け方、聞いたこともない不思議な鳥のさえずりで目覚める。日本では観葉植物として屋内で育てられているベンジャミンが、街路樹だ。

首都サン・サルヴァドル。国名にもある「サルヴァドル」とは「救世主」という意味がそうだ。

「先生方、観光名所もいいけど、滅多に見られないところへ行きませんか？」という現地事務所上島所長に誘われ、出かけたところは首都郊外の山中にある大規模なゴミ捨て場だった。

そこは遠くからでもよくわかった。上空にたくさんのコンドルが黒々と輪を描いているからだ。かつては谷間だったのかもしれないが、ゴミ捨て場はすでに一つの山となっている。その頂までバスで登る。すると収集車から捨てられるゴミに集まる大勢の人々と、ゴミをついばむコンドルの群が目飛び込んできた。周囲には人々の住むダンボールでできた堀立小屋も見える。

その光景を目の当たりにすると「ゴミ収集車は日本の援助です。」という説明も何か虚ろな響きしか持たなかった。生きていくため、金になるゴミは現金化し、まだ食べられるものは口にする。それがこの生活だ。



写真6 ゴミ廃棄場



写真7 グループミーティングではこの学校で活動している青年海外協力員とJICA現地職員が通訳にあたった。

だが、私の心を強く打ったことは、このあられもない生活をのぞきにきた物見遊山の異国人たちに、明るく手を振る子供の笑顔だった。あの笑顔こそ「サルヴァドール」ではないか。(写真6)

## 6 最大の輸出は人間？

### — 高校訪問 —

朗らかな笑顔に、いつも出会えた。そしてこの笑顔は、前向きに積極的に生きていこうとする人々の姿勢の現れであるのだ。

首都サン・サルヴァドルの国立工業技術高等学校を会場校として、いくつかの高校から校長、教員、高校生に集ってもらい、グループミーティングを行った。(写真7)

小学校への進学率は80~85%。そのうち60%が小学校6年まで進学し、他の子供たちは中退してしまう。高校卒業者は該当年齢者の30%にすぎない。識字率20%。地域にある「エルコー」と呼ばれる共同体の活動で進学率が向上しているという。

高校の授業時間は日本より多いような印象を受けた。学校により若干異なるが、午前中8時間、そして午後8時間(40分授業)。生徒はどちらかを選ぶ。

特徴的なものに「学校運営審議委員会」という組織がある。学校の最高責任機関であり、資金運営やカリキュラム、そして人事をも決定する。校長、教師、保護者、生徒によって構成されている。保護者や生徒も教育に対する高い関心を持っていないとこうした審議委員会は成立しないだろう。また、教員も自分たちの仕事に責任感を持たざるを得ないようなシステムだ。

教育システムや学校の現状に終始した我々の質問に対し、エル・サルヴァドルの先生方から尋ねられたなかで印象的だったものに、「戦後日本が急速に経済復興した理由は何か」という質問がある。

エル・サルヴァドルはコーヒーで年間約2億ドルの収入があるという。その一方、アメリカへの出稼ぎが130万人。彼らが約10億ドルの外貨をかせぐ。国内産業1位の収入より、出稼ぎで送金される金額の方が多い。国内産業の空洞化が心配され、物価は決して安くない。

狭い国土、乏しい資源。日本と共通する点が多く、事実「中米の日本」とも呼ばれる。モノがなければ当然、高い教育を身につけ高度な技術力を求めなければはならない。国立工業技術高等学校にも、技術移転という援助の一環で、青年海外協力隊員が派遣されている。

「戦後日本の急速な経済復興の理由」は、まさしく

内戦が終わったばかりのこの国が発展するための手ばかりでもあるのだ。

## 7 境界を越えて

京都外国語大学考古学専攻、大井教授はグアテマラ国境に近いサンタ・アナ近郊の遺跡発掘調査を行っている。ここまで見てきた活動現場は、研究所や学校が中心であったが、ここは草木に覆われた土の上が援助の現場だ。

当地の遺跡もピラミッドが中心となっているものの、メキシコの石でできたものと異なり、土でできている。そのため残念ながら石のピラミッドほど保存状態がよくない。また盗掘といっても過言ではないような過去の発掘のせいで、傷みが一層ひどくなっていた。

発掘調査は同時に修復工事でもあった。現地の職人に修復工事を任せ、その技術に依存すると同時に、彼らの技術向上も促す。大規模な機材は必要ない。手作業で調査は進んでいた(写真8)。調査が終われば、このピラミッドに観光客が登れるようにしたいという。観光客がやってくればピラミッドが観光資源となり、この地域が活気づく。

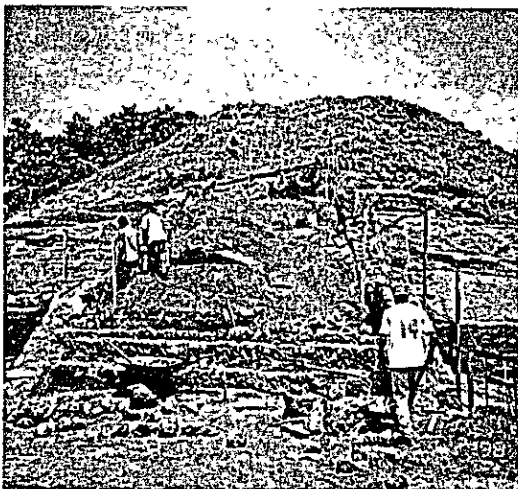


写真8 発掘調査

「これからの考古学は社会に結びつかなくてはならないと、私だけかもしれないが、考えるのです。」と、謙遜して大井教授は語った。新鮮な発想だった。学間がその専門の枠を越える瞬間を見た気がした。

学間研究と援助活動を孤立した別のものと考えてのではなく、それぞれが境界を越えて結びついていけば、どんなに楽しいことだろう。実際の現場ではこうした境界を越えた結びつきが進んでいるのに、自分の頭だけが「援助活動」を硬直したものとして捉えていたようで、考えさせられた。

## 8 おわりに

### (1) 遠い日本

このレポート内容は開発途上国における日本の援助活動の現場報告より、訪れた両国の印象の方が多い。ひとつには、生活の違いが大きかったからだろう。人々の暮らしぶりから多くのことを学ぶことができた。日本との距離的な遠さが、精神的な遠さでもあった。

今回の研修では、自国の物差しで開発途上国を測ってしまうことが大きな誤りだということを痛感した。貧困の度合いが30年ほど前の日本と同じようだからといって、人々の気持ちを過去の自分たちのそれだと勝手に決めつけたり、日本のやってきた手法を押しつけたりする安易な発想では、事態の本質を見誤る。置かれた状況や時代が違う。そして最も異なるものに、背負ってきた歴史がある。

先入観のない視線を保つのは困難を伴う。だからこそ、知るべきことは多いはずだ。多様な世界のほんの一端でも知り得たことは、日本の援助活動を知るとともに、今後の教育活動に大きな財産となった。

### (2) ハリケーン「ミッチ」被災者への援助活動

1998年10月下旬に中米諸国を襲ったハリケーン「ミッチ」の報道に、胸が痛んだ。主な報道がホンジュラ



スやニカラグアに限られ、その力点も自衛隊の派遣問題へいつの間にか移ってしまったが、被害にあった国にエル・サルヴァドルの名を見たとき、笑顔を絶やさなかったエル・サルヴァドルの人々が思い出され、いたたまれなかった。

生徒たちもロングホームルームなどの時間で、撮影してきたビデオを見ていたから気持ちは同じだったのだろう。本校生徒会では秋の文化発表会でも扱ったグアテマラを対象とした募金活動を開始し、JICAグアテマラ事務所と電子メールで連絡を取りながら、すみやかに送金するよう態勢を整えている。(写真9) これも今回の海外研修で両国の人々と接する機会があったからだと思う。

ラテンアメリカという響きで思い出せる光、風、味わい、そして人々、それがいちばんの収穫だ。

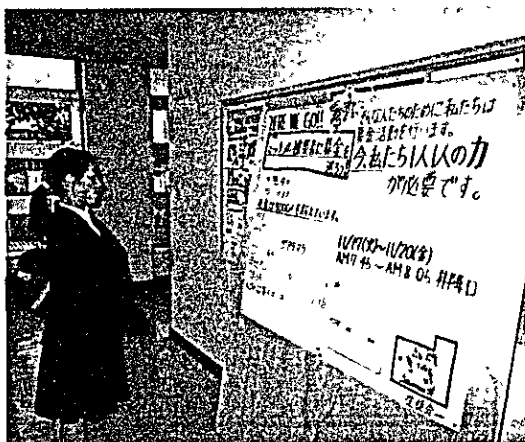
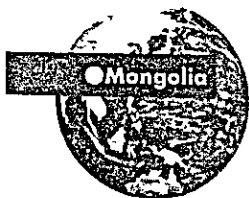


写真9 生徒会のハリケーン被害に対する反応はすばやかった。



# 草原と青い空に夢とロマンを 求める人達と出会って

～モンゴルを訪問して～



ATSUSHI KATO

加藤 敦史

地理

立命館大学慶祥高等学校

## 1 はじめに

今回の高校教員を対象とした国際協力事業団(JICA)の研修先は「草原と青い空」、「夢とロマン」、そのような言葉があてはまるモンゴルであった。

ここ数年の国際化、情報化、さらに人的交流の結果、先進国はもちろんのこと開発途上国についても、さまざまな手法によって国際理解が実践されている。たとえば修学旅行、少年団、姉妹都市関係、留学生・研修生との交流をはじめとする人的交流。また新聞、雑誌、テレビ、さらにインターネットなどからの情報など。

しかし同じアジアであり、さらにアルタイ語族と言う日本人と非常に近い存在であるモンゴルに関しての情報は、司馬遼太郎などの若干の紀行文や歴史関係などのものはあるが、現代のモンゴル事情に関しては皆無に近いと思われる。それは戦後のモンゴルと日本との関係が閉塞的なものであることに起因するからだろう。

「モンゴル」と聞くと多くの日本人はロマンを感じる人は多いのではないか。モンゴルは中国ではなく、韓国、朝鮮でもないのである。この微妙な違いを感じつつ13名の高校教員の研修は始まった。

## 2 モンゴルでの研修

### (1) JICAモンゴル事務所へ表敬訪問

我々を出迎えてくれたのは所長の四釜氏で、非常に

気さくな魅力のあふれる方であった。(写真1)これも長く海外での経験をつんだ国際人であるからであろう。所長の説明は今まで書籍等でしかモンゴルを勉強してこなかった我々にとって、実際に事業を担当されている人の生きた話であった。今までの我々の知識がいかに浅薄で机上のものかを痛感させられた。四釜所長とはモンゴル滞在中公私共にお世話になった。

### (2) 教育省と学校を訪問

8月4日に教育省を訪問する。我々を出迎えてくれたのはバトエルネデ次官であり、多忙なスケジュールのなかわざわざ時間を割いてくれた。教育の現状と問題などについて説明していただいた。総人口の40%が若者で、4人に1人が学生であるモンゴルは経済的な問題(教育費そのものが少なく、校舎や情報・伝達手



写真1 JICAモンゴル事務所にて 四釜所長を囲んで

段、教科書や教育機器費用不足や教師の人件費が安く教師志望者が少ない等)や子供たちの未就学率の問題、そして親の教育に対する理解などさまざまな問題を抱えながらも教育環境を整え、人材育成に努めている姿がよくわかった。

その日の午後には第23学校を訪問する。(写真2) ここには青年海外協力隊の派遣で2名の日本語の先生(大畑隊員と江口隊員)が働めている。1989年からこの学校では日本語教育を取り入れ、1994年から10、11歳の生徒が毎年30人が、3ヶ月間の日本への短期体験入学を実施している。日本での受け入れは高知県、兵庫県、島根県、香川県などで、ホームステイを体験している。この日本での短期留学を勉強の励みとしているそうだ。ここでの問題は日本語の教科書が不足していることである。生徒たちは交流会で上手な日本語で自分たちの夢を話してくれた。



写真2 第23学校での交流



写真3 森林計画センター

### (3) 森林計画センター訪問

ここには女性の今井隊員がモンゴルの大地を相手に植林計画という壮大な事業に挑んでいる。(写真3) 植林センターと聞いていたので、我々は立派な研究所で勤務されているのかと思ったが、町はずれの畑の中にビニールハウスがあるだけの施設に驚いた。今井隊員がどんなに苦勞されているかがよくわかった。

植林であるがシベリアカラ松の種から苗を育て、15cmの若木におよそ2年かけて成長させる。そして、その後移植をするのだが、直径28cmの成木のなるまで110年かかるそうだ。表土や降水量が少なく、そして冬が長いために、木の成長が遅いのである。1977年に全国植林計画が立てられたが、その目的は乾燥する国土の緑化と樹木の伐採や火災による森林回復、そして鉄道などの防風林を目的としてである。毎年5,000haの植林計画を実行している。今井隊員の地道な努力と情熱がなければモンゴルでの植林などは実行できないと痛感するとともに是非この壮大な計画を遂行してほしいと願うばかりだ。

### (4) 第一バス公社訪問

無償資金協力と技術協力によってウランバートル市民に目に見える援助を行っているのが、この第一バス公社での事業である。(写真4) 首都ウランバートルは人口63万人、その唯一の公共交通手段はバス輸送である。現在市内には566台のバスがあるが、実際に稼働しているのは353台であり、本来市内の公共交通サービスに必要とされているバス車両数618台に及ばない。



写真4 第一バス公社

このため市民生活には大きな支障をきたしていた。旧コメコンからの援助停止がその原因となっていた。日本からは無償資金協力で大型バス100台、修理工場、洗車装置（総額31億円）が1997年1月にモンゴルへ引き渡された。これは一般市民が日本からの援助を目に見える形で享受している。市内には日本からのバスが至るところで走行しており、これは我々にとってもすぐに理解できることであった。しかしバスの維持管理ならびに公社の経営には多くの問題点を抱えていた。例えばバスの日常点検、定期整備、運行計画、事故防止などのソフト面での協力が不可欠である。そこで札幌市の交通局から派遣された佐々木専門家が1997年4月よりその任務にあたっている。佐々木さんの話によると最大の問題は部品の不足などもあるが、経営が大幅な赤字でその原因は乗客の40%が無賃乗車と車掌の料金不正によるそうだ。

### 3 おわりに

上記のほかにも、空手教室の吉田隊員、開発投融資事業のモンゴルワカマル馬肥育牧場を視察し、また、ダンバダルジャー日本人墓地では焼香をした。その他、保養地テレルジでの乗馬、博物館見学、カンダン寺、マンズシール寺視察など（写真5）

モンゴルへの援助（1994年までの実績）は有償資金協力153.69億円、無償資金協力232.6億円、技術協力56.3億円で総額442.59億円となっている。もちろんこれは世界一のモンゴルへの援助国である。教育省を訪



写真5 グルの前で

れたときのことである。モンゴルの新聞とテレビ局の取材が我々にあった。（写真6、資料1）このときに我々の訪問目的などの他に次のことを尋ねられた。「日本の援助はモンゴルの人たちに役に立っていると思いますか？」私は即座に「我々はそれを確かめるために来たのです」と答えた。我々は短いモンゴル滞在中で日本の援助のあり方を確認する術もないのは当然であるが、我々が出会った人たちのモンゴルへの情熱と誠意、それはまさに「草原と青い空」に「夢とロマン」を追い求める姿。私はその姿を見て援助のあり方を確信できた。

「我々はものをあげる機関ではない、国造り、人造りのために役に立ちたい。魚はあげないが、釣り方を教えよう。」「モンゴルの30年後を考えて援助をしたい。」所長の四釜氏の言葉を最後に記したい。



写真6 教育省にてテレビ局のインタビューに答えて

## Япон сурагчдад Монголыг таниулна

Японы Токио, Хоккайдодогийн сургуулийн 13 багш олон улсын хамтын ажиллагааны «Жайка» байгууллагын шугамаар Монголд ирлээ Тэд Газэрлийн Яамны төрийн нарийн бичгийн дарга Р.Бат-Эрдэнэтэй өчигдөр уулзаж Монголын боловсролын байгууллагын өнөөгийн байдал, тулгарч буй бэрхшээлийн талаар ярилцсан байна. Япон багш нар нийслэлийн 23 дугаар сургууль, ХААИС, Авто-

бусны нэгдүгээр компани «Говь» үйлдвэр, Моңгол-Ядоны каратэгийн холбооны үйл ажиллагаатай танилцаж, «Жайка»-гийн шугамаар ажиллаж буй япончуудтайгаа уулзах аж. Моңголын талаар сурагчиддаа сурталчилж таниулах багш мэргэжилтэн солилцох, хоёр орны хамтын ажиллагааг бэхжүүлэх зорилготой гэж багш нарын ахлагч Катр Ацүли ярилаа. Т.БАЯР

資料1 我々の訪問を伝える現地紙（1998.8.5）

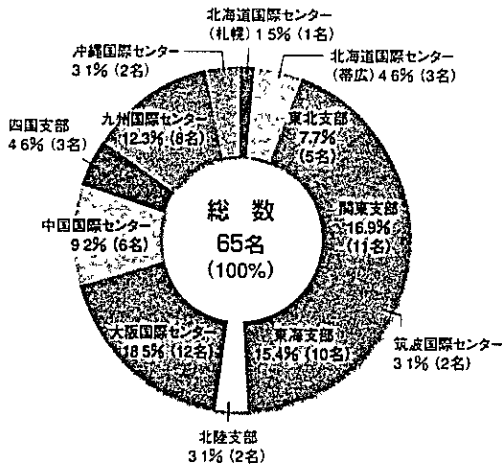
## ■ 参考資料 ■



## 1 募集概要

募集期間：平成10年1月26日～4月10日

応募総数：65名



## 2 事前研修

### (1) 国内機関研修

実施時期：平成10年6月～7月

実施場所：国際協力事業団各国内機関

研修内容：①開発途上国と現状と課題  
②ODAとJICAについて

### (2) 事前研修

実施時期：平成10年7月28日～29日

実施場所：東京国際研修センター (TIC)

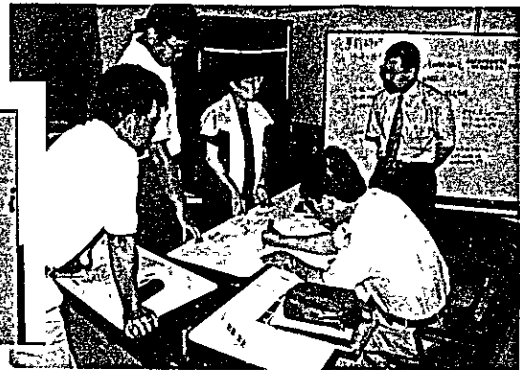
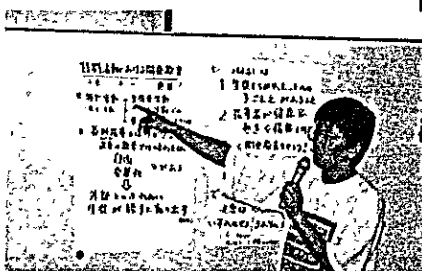
## 事前研修

### 7月28日 (火)

- JICA事業説明及び質疑応答
- 渡航手続等説明
- グループ別ディスカッション
  - 6グループに分かれ、グループごとに1つのテーマを決め、実践プランをたてる。
  - (1グループ) 生徒の興味・関心を高めるには
  - (2グループ) はじめての開発教育
  - (3グループ) 開発教育はなぜ広がらないのか
  - (4グループ) 開発教育を全職員に広めよう
  - (5グループ) 生徒の関心、開発教育の位置づけ、継続性
  - (6グループ) 特別活動における開発教育

### 7月29日 (水)

- グループ別ディスカッションの発表
- 各国概要説明、訪問国情報
- 開発教育ワークショップ
  - 講師：グローバル教育・西東京センター 桜井 高志 氏
  - 参加型学習、学校で使える開発教育の手法の紹介等
- JICAの開発教育支援事業の取り組みについて
- 研修コース別ディスカッション
- 結団式



### 3 コース別日程／参加者氏名

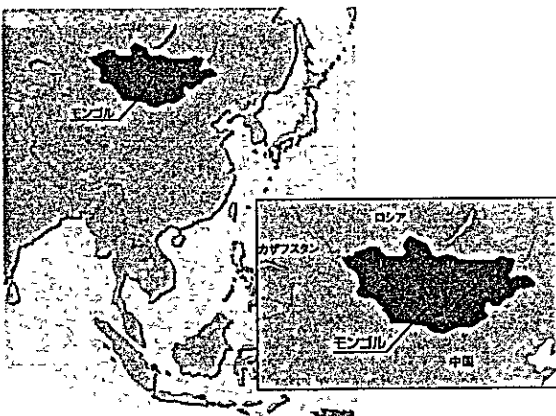
●モンゴル

Mongolia

月日(曜)	午前	午後
7/30(木)	14:55 成田発	17:45 北京着
7/31(金)		午後 万里の長城視察
8/1(土)	7:40 北京発	終日 車中
8/2(日)	午前 車中	13:30 ラウンバートル着
8/3(月)	10:00 JICAモンゴル事務所訪問	午後 郊外テレビジ視察
8/4(火)	10:00 教育省視察 11:30 自然史博物館視察	14:00 第23中学校視察 16:00 ガンダン寺視察 19:00 協力隊員活動現場視察(吉田隊員:空手)
8/5(水)	10:00 協力隊員活動現場視察(今井隊員:植林) 11:30 ダンバダルジャー日本人墓地視察	15:00 第一バス公社(無償、技協) 16:30 モンゴル・ワカマル馬肥育牧場視察(農協投融资事業) 18:00 懇親会
8/6(木)	8:00 郊外マンズシール寺視察	14:00 ゴビカシミア工場視察(無償) 16:30 自由行動 19:00 懇親会
8/7(金)		12:35 ウランバートル発 空港から北京市内視察直行(天安門広場、博物館、京劇鑑賞) 14:35 北京着
8/8(土)	9:25 北京発	13:50 成田着

氏名	所属学校／担当教科	氏名	所属学校／担当教科
加藤 敦史	(北海道) 私立立命館大学慶祥高校 地理	戸澤由佳奈	(神奈川県) 私立横浜学院女子中・高校 英語
今井 真	北海道帯広農業高校 英語	橋本 哲史	栃木県立黒磯南高校 地歴
藤本 正彦	岩手県立一関農業高校 農業	杉淵 由博	東京都立葛飾野高校 世界史/倫理
加藤 浩	山形県立山形南高校 地歴	木戸孝一郎	千葉県立木更津高校 世界史
菅原 幸恵	岩手県立岩泉高校田野畑校 英語	太田 哲嗣	静岡県立浜松北高校 世界史
濱砂 千夏	東京都立玉川高校 英語	齊藤 達也	茨城県立岩井高校 理科
女屋 隆充	東京都立多摩工業高校 公民		

●同行者 大能 雄一 (JICA関東支部 現ブラジル・アマゾン森林研究計画専門家)



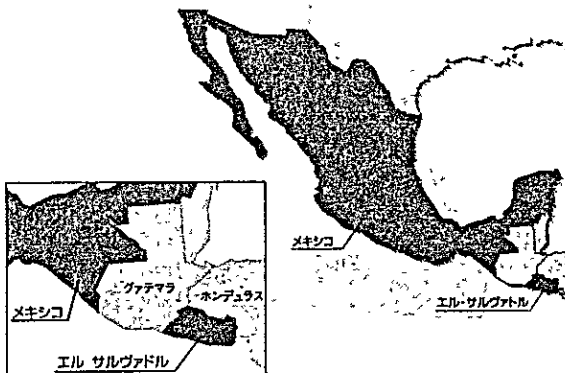
ゲルの前にて

参考資料

月日(曜)	午前	午後
7/30(木)		17:40 成田発 17:00 アトランタ着 19:30 アトランタ発 22:10 メキシコ着
7/31(金)	午前 JICAメキシコ事務所訪問 日本メキシコ学院視察	午後 環境研究研修センタープロジェクト視察
8/1(土)		午後 協力隊員活動現場視察 (竹下隊員:ピノ・スアレス縫製工場) (池下隊員:市場調査) (安田隊員:手工芸品開発)
8/2(日)	午前 ティオテイワカン遺跡視察	午後 国立人類学博物館視察
8/3(月)	午前 モレロス州野菜生産技術改善計画 プロジェクト視察	午後 地方視察(クエルナバカ市等) 事務所主催懇親会
8/4(火)		12:20 コマラバ空港発 15:00 JICAエル・サルヴァドル駐在員事務所訪問 16:00 日本大使館表敬訪問 18:30 事務所主催懇親会
8/5(水)	9:30 国立工業技術高校視察(協力隊員活動現場) (小林、藤原、小野隊員)	12:30 協力隊員との昼食懇親会 14:00 サン・サルヴァドル市内視察
8/6(木)	10:00 チャルチュエバ遺跡発掘現場視察	午後 タスマル遺跡、サン・アンドレス遺跡、 ホヤ・デ・セレン遺跡、スモーキーマウン テン視察
8/7(金)		午後 協力隊員活動現場視察(佐々木隊員:花井)
8/8(土)	9:40 漁港視察(ラ・リベルタ) 11:00 漁港発	14:00 サンサルバドル発 19:17 アトランタ着
8/9(日)	10:30 アトランタ発	
8/10(月)		12:50 成田着

氏名	所属学校/担当教科	氏名	所属学校/担当教科
西尾 源寿	岐阜県立多治見北高校 地歴/公民	山内 明子	京都府立八幡高校 英語
浅田 裕乃	(愛知)私立桜丘高校 国語	今西 督	奈良県立上牧高校 地歴/公民
成瀬 牧己	愛知県立春日井南高校 国語	清水 律子	兵庫県立相生高校 英語
松井 元雄	石川県立七尾農業高校 農業	柚木 三男	(兵庫)私立報徳学園中・高校 英語
谷口 隆雄	京都府立園部高校 政経/国際理解	廣谷 敏二	(大阪)私立此花学院高校 地歴

●同行者 和田 孝英 (JICA北陸支部)



エル・サルヴァドルのタスマル遺跡にて



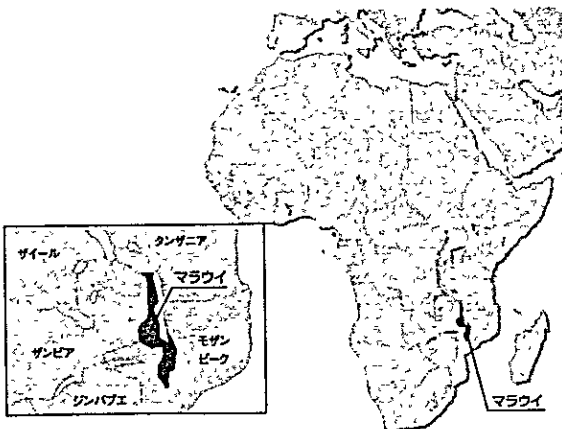
■マラウイ

参考資料

月日(期)	午前	午後
7/30(木)	11:00 成田発	15:30 ヒースロー着 21:45 ガトウィック発
7/31(金)	10:30 リロンゲ発	15:00 JICAマラウイ事務所訪問 18:30 事務所との懇親会
8/1(土)	10:00 保健省カスング病院視察 (吉田隊員:薬剤師)	15:00 カスング国立公園着
8/2(日)	午 前 ゲームドライブ(野生動物観察)	14:00 国立公園発 17:30 ムズズ着 協力隊員との懇親会
8/3(月)	10:30 国立リビングストニア セカンダリースクール視察 (三輪隊員:理数科教師)	14:30 ムゾコット着 私立ブエジセカンダリースクール視察 (大木隊員:理数科教師)
8/4(火)	10:30 国立エイシセカンダリースクール視察 (大久保隊員:理数科教師) 授業見学、及び意見交換	午 後 ムジンバ西地域給水計画視察 (深井戸堀井現場)
8/5(水)	9:00 ムズズ市役所視察(森下隊員:土木施工) 10:30 水産局魚類養殖現場視察(末吉隊員:養殖) 12:00 昼食後マラウイ湖へ移動	15:00 ンカタベイ港湾視察 17:00 チンテンシビーチ着
8/6(木)	10:00 チンテンシン発 ブワンジェバレー灌漑計画視察(無償資金協力)	16:30 リロンゲ着
8/7(金)	9:00 リロンゲ発 10:30 国立マガワセカンダリースクール視察 (青木隊員:理数科教師)	14:30 リロンゲへ移動 15:30 保健省コミュニティヘルスサイエンスユニット視察 (公衆衛生プロジェクト:専門家5名)
8/8(土)	終日自由行動 リロンゲ郊外農村地域農業普及協力活動視察(希望者のみ)(丹羽隊員:野菜、山内隊員:土壌肥料) 18:30 専門家、協力隊員との夕食懇親会	
8/9(日)	午 前 自由行動 事務所長主催昼食会	18:30 リロンゲ発
8/10(月)	5:55 ガドウィック 発	13:25 ヒースロー発
8/11(火)	5:55 成田着	

氏名	所属学校/担当教科	氏名	所属学校/担当教科
古田 千博	島根県立松江農林高校 英語	角田佳寿子	(福岡)私立福岡女学院高校 世界史
長峰 佳則	(島根)私立明誠高校 英語	富山 隆志	宮崎県立延岡工業高校 工業
植田 佳宏	広島県立海田高校 国語	山田 知之	大分県立大分東高校 英、仏語
河野 幸浩	広島県立三次青陵高校 工業	衛藤 朋子	大分県立大分商業高校 英語
柿原 秀文	(愛知)国立愛媛大学農学部附属農業高校 農業	中村 幸弘	沖縄県立北部農林高校 農業

●同行者 二村 昌治 (JICA中国国際センター)



保健省カスング病院の前で吉田隊員とともに

## 4 開発教育関係団体及び教材紹介

開発教育や開発問題について、もっと詳しく知りたい方々のために、開発教育を実施している団体や、役立ちそうな教材/素材をリストアップしてみました。国際協力事業団（JICA）刊行のものは、各JICA国内機関にお問い合わせください。

### ■開発教育関係団体

機関名	所在地	活動*
NGO活動推進センター (JANIC)	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-9-1 斉藤ビル5階 TEL03(3294)5370 FAX03(3294)5398	①～③、⑤、 ⑥NGO市民情報センター
名古屋NGOセンター	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南 1-20-11 本田ビル3階北 TEL052(588)3680 FAX352(588)3680	①～⑤
関西NGO協議会	〒550-0001 大阪府大阪市西区土佐堀1-5-6 大阪YMCA土佐堀館国際社会奉仕センター内 TEL06(6441)5598 FAX06(6443)0739	①～③、⑤、 ⑥関西NGO大学
開発教育協議会	〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-76 TEL03(3207)8085 FAX03(3207)8486	①～③、⑤、 ⑥開発教育情報センター
国際理解教育センター (ERIC)	〒114-0013 東京都北区東田端1-14-1 岩瀬ビル TEL03(3800)9414 FAX03(3800)9416	①～⑤ ⑥施設利用、カリキュラム 開発など
シャプラニール=市民に よる海外協力の会	〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園スコットホール内 TEL03(3202)7863 FAX03(3202)4593	①～⑤、⑥作文・小論文コン クール、バングラデシュ製 品輸入販売
曹洞宗国際ボランティア会 (SVA)	〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-28-5 ヒカリビル202号 TEL03(3945)0981 FAX03(3942)7900	①～⑤、 ⑥図書館
財団法人 国際協力推進協会 (APIC)	〒106-0047 東京都港区南麻布5-2-32 第32興和ビル TEL03(5423)0571 FAX03(5423)0576	①～③、 ⑥国際協力プラザ
社団法人 協力隊を育てる会	〒160-0000 東京都新宿区霞ヶ丘町15 日本青年館内 TEL03(3402)2153 FAX03(3402)3263	①～③、⑤ ⑥小さなハートプロジェクト
社団法人 青年海外協力協会	〒106-0047 東京都港区南麻布5-10-24 第二佐野ビル7階 TEL03(3446)3651 FAX03(3446)3652	①～③、⑤
財団法人 日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)	〒160-0015 東京都新宿区大京町31-10 第一大京ビル TEL03(3355)3221 FAX03(3355)3810	①～③ ⑥図書館
社団法人 日本ユネスコ協会連盟 (日ユ協連)	〒101-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階 TEL03(5424)1121 FAX03(5424)1126	①～⑤、 ⑥ユネスコ広報センター

\*①セミナー開催 ②講師の派遣 ③資料の収集・開発・提供 ④スタディツアー ⑤機関誌の刊行 ⑥その他

開発教育教材/素材

分類	タイトル	内容	問い合わせ先	備考
本冊子 パック フレット	開発教育ダイレクトリー'97	日本の開発教育を進める団体の活動を紹介した冊子	開発教育協議会 TEL 03 (3207) 8085	有料
	開発教育ハンドブック	各種開発教育実践例を紹介した冊子		
	開発教育カタログ'95	開発教育に役立つ本や映像、ゲームなどを紹介した教材カタログ		
	「開発教育」ってなあに?	開発教育についての取り組みをわかりやすく紹介した小冊子		
	新しい開発教育のすすめ方	テーマごとに模擬授業を紹介した、教師や社会教育現場で新しい開発教育に取り組む指導者のための参考資料	古今書院 発行 TEL 03 (3291) 2757	有料
	開発教育のすすめ	具体的事例を通して開発教育の理論を分かりやすく紹介、解説	かもかわ出版 TEL 075 (432) 2868	有料
	開発教育実践の手引き	開発教育の実践例を掲載した冊子	APIC TEL 03 (5423) 0571	有料
	南北問題と開発教育	南北問題とは何か、開発教育とは何かを解説した本	田中治彦 著 亜紀書房 発行 TEL 03 (5280) 0261	有料
	ユニセフの開発のための教育 地球市民を育てるための実践ガイドブック	参加型の体験学習の例を分かりやすく紹介したガイドブック	(財)日本ユニセフ協会 TEL 03 (3355) 3224	有料
	ユニセフによる地球学習の手引き	国際児童基金による「ユニセフによる地球学習の手引き」に、日本の小中学校での実践事例を加えたもの	教育出版 TEL 03 (3238) 6864	有料
	国際理解教育展開事例集	国際交流・帰国子女教育・科目別国際理解教育の事例を紹介した本	一橋出版 発行 TEL 03 (3392) 6021	有料
	国際理解教育	国際理解教育、開発教育、ワールドスタディズを検討し、「地球市民を育てる教育」のカリキュラム試案を提示	国土社 TEL 03 (3943) 3721	有料
テキスト国際理解	基本的な概念、理論的な枠組、アプローチの仕方を提示し、実践に役立つ具体例を盛り込み、教材として利用できるようにまとめたもの			
地球市民を育てる教育	地球市民の視点でものを考える力の養成を教育の場に求める「世界を育てる心を養う教育」への手引書	岩波書店 TEL 03 (5210) 4000		

分類	タイトル	内 容	問い合わせ先	備考
本 冊 子 パン フレ ット	ワールドスタディーズ ～学び方・教え方ハンドブック	国際理解教育のさまざまな事例を 説明した本	ERIC TEL 03 (3800) 9414	有料
	フードファーストカリキュラム ～食べ物を通して世界を見つめよう	身の回りの「食」を通して世界との つながりを説明した本		
	あなたもできる国際ボランティア	これから始める人のために、手が かりや実践事例を紹介した入門マ ニュアル	ジャパンタイムス TEL 03 (3453) 2013	有料
	国際協力用語集 第2版	国際協力を携わる方から初心者 まで幅広く国際協力関連用語の 解説書		
	国際協力ガイド'99	「仕事する」「参加する」「学 ぶ」の3章で、国際協力を携わ りたい人たちへ手がかりを提供 する情報誌	国際開発ジャーナル TEL 03 (3584) 2191	有料
	高校教師海外研修参加者教師に よる、開発教育実践のための事 例集	地球と語りたい 平成6年度版 地球と共に生きる 平成7年度版 教室から地球へのメッセージ 平成8年度版 未来の地球人たちへ 平成9年度版	JICA 広報課 TEL 03 (5352) 5029	
いま私たちにできること	中学生・高校生を対象に国際協力、 開発教育について考えてもらうこ とを中心にまとめた副読本			
ビ デ オ ス ラ イ ド	地球の仲間たち (Part I、II)	途上国の人々と日本の人々の暮ら しを「服装」「食べる」「子供た ちの生活」などの面から紹介した スライド	開発教育を考える会 TEL 0462 (55) 1867	貸出 可
	開発教育キット (Part 1～4)	途上国の児童画スライド (Part1) 「動くアジア」スライド (Part2) 「アジアのうねり」ビデオ (Part3) 「アフリカ大好き」ビデオ (Part4) スライド・ビデオと教師用シナリオが セットになった開発教育用の教材	APIC TEL 03 (5423) 0571	貸出 可
	ODAって何だろう?	中米のグアテマラ、エル・サルヴァド ルにおけるプロジェクトを中心に紹介し、 日本の援助を分かりやすく解説		
	開発途上国ってどんな国? ～小さな友情から大きな夢へ～	日本人の少年が途上国を訪れ、 現地の生活の困難さを目の当たり にし、途上国を認識していくアニ メーションビデオ	(財)日本視聴覚教材センター TEL 03 (3552) 6088	貸出 可

分類	タイトル	内容	問い合わせ先	備考
ビデオ スライド	約束 ～アフリカの水と緑～	日本人の少年とアフリカの遊牧民の子供との友情を描くアニメーションビデオ	JICA各国内機関 (p53参照)	貸出可
	それぞれの地平線	ケニア、ブラジル、カンボディアの援助を通じて、技術協力の意義、役割を紹介		
定期刊行物	国際協力*	途上国の現状やJICA事業に関するさまざまな情報を取り扱ったJICAの広報誌(月刊)	JICA広報課 (p53参照)	有料 ¥500
	クロスロード	「顔の見える援助」の最前線で活躍している青年海外協力隊員の生の声を伝える雑誌(月刊)	協力隊を育てる会 TEL 03 (3402) 2153	有料 ¥310
	国際開発ジャーナル	ODAと国際協力の系統的情報を網羅するわが国唯一の専門月刊誌(月刊)	国際開発ジャーナル社 TEL 03 (3584) 2191	有料 ¥850
	国際協力プラザ	国内外の国際協力に関わる情報を、一般市民向けにわかりやすく掲載している情報誌(月刊)	APIC TEL 03 (5423) 0571	有料 ¥500

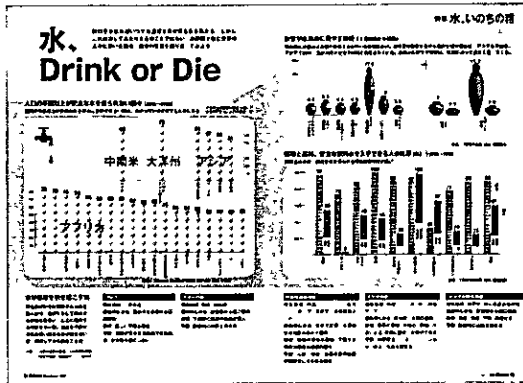
\*「国際協力」誌は、途上国や国際協力に関心を持ち、学校教育現場の先生方にとって開発教育の実践に役立つ情報誌です。

- 「アジアのことなら何でも知りたい!」
- 「アフリカの人たちはどんな生活をしているのだろうか?」
- 「ODAはどんな援助をしているの? NGOの仕事とは?」
- 「途上国ではどんな援助を必要としているのかしら?」
- 「JICAって、どんな仕事をするとところかな?」

こうした疑問に応えるために、本誌では、一般では、一般に開発途上国と呼ばれる地域の実情と、JICAが実施している協力活動を紹介しています。

また、毎月、多くの途上国が抱えている課題を特集で取り上げ、これらの問題解決のために援助を実施していることを理解いただくよう努めています。

人口、環境、医療等地球社会をとりまく課題について考える上でヒントになる情報、データがたくさん掲載されています。授業等でぜひ活用ください。



# JICAはこんなこともしています

## ●高校生エッセイコンテスト

開発途上国や国際協力について考えていることを、400字語原稿用紙4枚以内にまとめて応募してください。募集期間は1月～5月半ばまで資格は高校生であること。特選 準特選受賞者には、副賞として海外研修旅行を用意しています。(98年は、パラグアイ、ベトナム) ほかに審査員特別賞など多数の賞を用意しています。

## ●高校生国際協力実体験プログラム

JICAの国際センターを拠点に高校生及び指導教員を招き、約2泊3日で国際協力について理解を深めてもらう機会を提供しています。主にJICA事業の紹介、開発教育ワークショップ、協力隊OB OGの体験談、研修員との交流をおこなっています。

## ●JICA図書館

JICAの各種刊行物 資料のほか、国際協力に関する書籍や雑誌などを備えた専門図書館。ビデオも館内で見られます。  
〒162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5  
国際協力総合研究所内  
TEL 03-3269-2301

## ●JICAギャラリー

JICAの活動を紹介するパネルが展示されています。地域のNGOの活動なども紹介予定。  
〒559-0034 大阪府大阪市住之江区南港北1-14-16  
大阪ワールドトレードセンタービルディング51F  
TEL 03-615-6003

## ●JICAホームページ

JICAの実施する事業や青年海外協力隊員募集、またエッセイコンテストの入賞作品も見られます。

## ●講師の派遣

開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性を理解していただくため、JICA職員や専門家、青年海外協力隊OB・OGなどを講師として学校などへ派遣しています。

## ●国際協力フォトコンテスト

途上国における技術協力や交流の現場を紹介する国際協力部門と、途上国の人々の生活、自然や文化などを素材とする一般部門に分けておこなわれます。どちらの部門も特選には賞金と副賞を贈呈。応募作品は、本人が撮影したもので、カラープリント、単写真、サイズはキャビネ判相当。未発表のものに限ります。募集は通常3月～6月。

## ●青年海外協力隊

途上国の人びとは生活をともにしながら、技術を活かして途上国の国づくりに協力します。技術を持ち、20歳から39歳までの日本国籍を持つ青年であれば、誰でも協力隊に応募できます。募集選考は毎年春と秋の2回。合格すると、約80日間の語学研修などの訓練を受けた後、派遣されます。単身赴任が原則で、派遣期間は2年。

## ●シニア海外ボランティア

自分の技術・知識・経験で途上国の開発に協力したいというボランティア精神にあふれた40歳から69歳までの人が対象。登録後年2回、送られてくる「シニア海外ボランティアニュース」で、希望の要請があれば応募します。派遣期間は1年または2年。

年齢	20歳		30歳	40歳	50歳	60歳	60歳～老後
	(中学校生活)	(高校生活)	(大学生生活)	社会人			
JICAの募集内容 JICAはこんなことを募集しています	中学生エッセイコンテスト	高校生エッセイコンテスト	大学生論文コンテスト	青年海外協力隊 (JOCV) 募集対象年齢 (20才～39才)			
				(個別) 専門家登録可能年齢 (30才～59才)			
				日系社会青年ボランティア 募集対象年齢 (20才～39才)	日系社会シニア海外ボランティア 募集対象年齢 (40才～69才)		
				ジュニア専門員 募集対象年齢 (25才～35才)	国際協力専門員 募集対象年齢 (35才～50才)		
				青年招へい合宿セミナー 参加者対象年齢 (20代後半～40才)			
				(先生方には中学教師・高校教師海外研修)			

## ■JICA問い合わせ先

本部 〒151-8558 東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインズタワー12階  
国際協力事業団総務部広報課 TEL 03 (5352) 5029 FAX 03 (5352) 5032  
URL <http://www.jica.go.jp/Index-j.html>

### 北海道国際センター（札幌）

〒003-0026 北海道札幌市白石区本町16丁目南4-25  
TEL 011 (866) 8333 (代)  
FAX 011 (866) 8382

### 北海道国際センター（帯広）

〒080-2470 北海道帯広市西20条南6-1-2  
TEL 0155 (35) 1210 (代)  
FAX 0155 (36) 2582

### 東北支部

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1  
仙台第一生命タワービル15階  
TEL 022 (223) 5151 (代)  
FAX 022 (227) 3090

### 二本松青年海外協力隊訓練所

〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2  
TEL 0243 (24) 3200 (代)  
FAX 0243 (24) 3214

### 筑波国際センター

〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6  
TEL 0298 (38) 1111 (代)  
FAX 0298 (38) 1119

### 関東支部

〒336-0002 埼玉県浦和市北浦和4-5-5  
北浦和大柴ビル7階  
TEL 048 (834) 7770 (代)  
FAX 048 (834) 7775

### 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂15  
TEL 0265 (82) 6151 (代)  
FAX 0265 (82) 5336

### 東海支部

〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内2-4-7  
愛知県産業貿易館西館8階  
TEL 052 (221) 7103 (代)  
FAX 052 (201) 9516

### 北陸支部

〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-3  
リファーレビル3階  
TEL 076 (233) 5931 (代)  
FAX 076 (233) 5959

### 大阪国際センター

〒567-0058 大阪府茨木市西豊川町25-1  
TEL 0726 (41) 6900 (代)  
FAX 0726 (41) 6910

### 中国国際センター

〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1  
広島中央サイエンスパーク内  
TEL 0824 (21) 6300  
FAX 0824 (20) 8082

### 四国支部

〒760-0050 香川県高松市亀井町5-1  
百十四ビル13階  
TEL 0878 (33) 0901 (代)  
FAX 0878 (37) 0747

### 九州国際センター

〒805-0062 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1  
TEL 093 (671) 6311 (代)  
FAX 093 (663) 1350

### 沖縄国際センター

〒901-2102 沖縄県浦添市字前田1143-1  
TEL 098 (876) 6000 (代)  
FAX 098 (876) 6014



参考資料

地域国際化協会一覧

都道府県	団体名	所在地	電話番号 (FAX番号)
北海道	(社)北方圏センター	〒060-0003 札幌市中央区北三条西7丁目 道庁別館	011-221-7840 (011-221-7845)
青森県	(財)青森県国際交流協会	〒030-0803 青森市安方1-1-32 水産ビル5F	0177-35-2221 (0177-35-2252)
岩手県	(財)岩手県国際交流協会	〒020-0025 盛岡市大沢川原2-4-20	019-654-8900 (019-654-8922)
宮城県	(財)宮城県国際交流協会	〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17 宮城県仙台合同庁舎7F	022-275-3796 (022-272-5063)
秋田県	(財)秋田県国際交流協会	〒010-0951 秋田市旭北栄町1-5 秋田県社会福祉会館4F	018-864-1181 (018-864-0160)
山形県	(財)山形県国際交流協会	〒990-0042 山形市七日町1-4-47 COCO21ビル5F	023-624-0043 (023-624-0064)
福島県	(財)福島県国際交流協会	〒960-8103 福島市舟場2-1 福島県庁舟場町分館2F	024-524-1315 (024-521-8308)
茨城県	(財)茨城県国際交流協会	〒310-0851 水戸市千波町後川745 県民文化センター分館2F	029-241-1611 (029-241-7611)
栃木県	(財)栃木県国際交流協会	〒320-0033 宇都宮市宮本町9-14 とちぎ国際交流センター内	028-621-0777 (028-621-0951)
群馬県	(財)群馬県国際交流協会	〒371-0023 前橋市本町1-4-4 安田火災群馬ビル6F	027-243-7271 (027-243-7275)
埼玉県	(財)埼玉県国際交流協会	〒331-8669 大宮市桜木町1-7-5ソニックシティビル4F	048-647-4175 (048-647-4176)
千葉県	(財)千葉県国際交流協会	〒261-7114 千葉市美浜区中瀬2-6 W.B.G マリブイースト14F	043-297-0245 (043-297-0307)
東京都	(財)東京国際交流財団	〒100-0005 千代田区丸の内3-5-1 東京国際フォーラム11F	03-5221-9000 (03-5221-9011)
神奈川県	(財)神奈川県国際交流協会	〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ1F	045-896-2626 (045-896-2945)
新潟県	(財)新潟県国際交流協会	〒950-0965 新潟市新光町16-4荏原新潟ビル3F	025-285-6020 (025-283-5931)
富山県	(財)とやま国際センター	〒930-0856 富山市牛島新町5-5 インテック明治生命ビル4F	0764-44-2500 (0764-44-2600)
石川県	(財)石川県国際交流協会	〒920-0853 金沢市本町1-5-3 リファレ3F 石川県国際交流センター内	076-262-5931 (076-263-5931)
福井県	(財)福井県国際交流協会	〒910-0004 福井市宝永3-1-1	0776-28-8800 (0776-28-8818)
山梨県	(財)山梨県国際交流協会	〒400-0035 甲府市飯田2-2-3 山梨県国際交流センター内	0552-28-5419 (0552-28-5473)
長野県	(財)長野県国際交流推進協会	〒380-8570 長野市南長野692-2 長野県庁東庁舎1F	026-235-7186 (026-235-4738)
岐阜県	(財)岐阜県国際交流センター	〒500-8384 岐阜市藪田南5-14-53 岐阜県県民ふれあい会館6F	058-277-1013 (058-272-8839)
静岡県	(財)静岡県国際交流協会	〒420-8601 静岡市追手町9-6静岡県庁西館4F	054-221-3355 (054-251-8148)
愛知県	(財)愛知県国際交流協会	〒460-0001 名古屋市中区三の丸2-6-1 愛知県三の丸庁舎1F, 2F	052-961-8744 (052-961-8045)
三重県	(財)三重県国際交流財団	〒514-0003 津市桜橋3-446-34三重県津庁舎5F	059-223-5006 (059-223-5007)
滋賀県	(財)滋賀県国際友好親善協会	〒520-0044 大津市京町4-1-1滋賀県国際課内	077-526-0931 (077-521-5030)
京都府	(財)京都府国際センター	〒600-8216 京都市下京区烏丸通塩小路下る東塩小路町657 京都駅ビル9階	075-342-5000 (075-342-5050)
大阪府	(財)大阪府国際交流財団	〒537-0025 大阪市東成区中道1-10-26 サクラ森ノ宮ビル10F	06-973-7500 (06-973-7575)
兵庫県	(財)兵庫県国際交流協会	〒650-0071 神戸市中央区臨浜海岸通1-5-1 国際健康開発センタービル2F	078-230-3260 (078-230-3280)
奈良県	(財)なら・シルクロード博 記念国際交流財団	〒630-8215 奈良市東向中町28奈良近鉄駅ビル6F	0742-27-1822 (0742-27-2434)
和歌山県	(財)和歌山県国際交流協会	〒640-8585 和歌山市小松原通1-1 和歌山県国際交流課内	0734-31-4344 (0734-33-1192)



都道府県	団体名	所在地	電話番号 (FAX番号)
鳥取県	(財)鳥取県国際交流財団	〒680-0947 鳥取市湖山町西4-110-5 鳥取空港国際会館1F	0857-31-5951 (0857-31-5952)
島根県	(財)しまね国際センター	〒690-0823 松江市西川津町3669 くにびきメッセ2F	0852-31-5056 (0852-31-5055)
岡山県	(財)岡山県国際交流協会	〒700-0026 岡山市奉還町2-2-1 岡山国際交流センター内	086-256-2000 (086-256-2226)
広島県	(財)ひろしま国際センター	〒730-0037 広島市中区中町8-18 広島クリスタルプラザ6F	082-541-3777 (082-243-2001)
山口県	(財)山口県国際交流協会	〒753-0811 山口市吉敷3185-1	0839-25-7353 (0839-20-4144)
徳島県	(財)徳島県国際交流協会	〒770-0831 徳島市寺島本町西1-61 クレメントプラザ6F	0886-56-3303 (0886-52-0616)
香川県	(財)香川県国際交流協会	〒760-0017 高松市番町1-11-63 アイバル香川内	087-837-5908 (087-837-5903)
愛媛県	(財)愛媛県国際交流協会	〒790-0007 松山市堀之内8	089-943-6688 (089-943-7787)
高知県	(財)高知県国際交流協会	〒780-0870 高知市本町4-1-37	0888-75-0022 (0888-75-4929)
福岡県	(財)福岡県国際交流センター	〒810-0001 福岡市中央区天神1-1-1 アクロス福岡内 こくさいひろば(情報課)3F 総務移住課・交流課8F	092-725-9200 (092-725-9206) 092-725-9204 (092-725-9205)
佐賀県	(財)佐賀県国際交流協会	〒840-8570 佐賀市城内1-1-59 佐賀県国際交流課内	0952-25-7921 (0952-23-8441)
長崎県	(財)長崎県国際交流協会	〒850-0873 長崎市諏訪町5-20	095-823-3931 (095-823-3929)
熊本県	熊本国際交流連絡協議会	〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1 熊本県国際課内	096-387-7527 (096-385-4488)
大分県	(財)大分県国際交流センター	〒870-0047 大分市中島西3-1-7	097-538-5161 (097-538-5162)
宮崎県	(財)宮崎県国際交流協会	〒880-0804 宮崎市宮田町1-6 宮城県庁東別館6F宮崎県国際交流センター内	0985-32-8457 (0985-32-8512)
鹿児島県	(財)鹿児島県国際交流協会	〒892-0842 鹿児島市東千石町1-38 鹿児島商工会議所ビル11F国際交流プラザ内	099-225-3279 (099-225-3284)
沖縄県	(財)沖縄県国際交流財団	〒902-0064 那覇市寄宮1-8-39	098-836-9900 (098-836-9920)
札幌市	(財)札幌国際プラザ	〒060-0001 札幌市中央区北1条西3札幌MNBビル	011-211-3610 (011-232-3673)
仙台市	(財)仙台国際交流協会	〒980-0856 仙台市青葉区青葉山仙台国際センター内	022-265-2211 (022-265-2485)
千葉市	(財)千葉市国際交流協会	〒260-0028 千葉市中央区新町1000 センシティタワー12F	043-238-8000 (043-238-8550)
横浜市	(財)横浜市海外交流協会	〒231-0023 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル3F	045-671-7128 (045-671-7187)
川崎市	(財)川崎市国際交流協会	〒211-0033 川崎市中原区木月紙園町237-1	044-435-7000 (044-435-7010)
名古屋市	(財)名古屋国際センター	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1	052-581-5678 (052-581-5629)
京都市	(財)京都市国際交流協会	〒606-8436 京都市左京区栗田口鳥居町2-1	075-752-3010 (075-752-3510)
大阪市	(財)大阪国際交流センター	〒543-0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6	06-772-5931 (06-772-7600)
神戸市	(財)神戸国際交流協会	本部 〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-9-1 国際部 〒651-0096 神戸市中央区雲井通5-3-1 サンバル8F	078-303-0030 (078-303-0039) 078-291-8415 (078-291-0691)
広島市	(財)広島平和文化センター	〒730-0811 広島市中区中島町1-5 広島国際会議場3F	082-242-8879 (082-242-7452)
北九州市	(財)北九州国際交流協会	〒805-0062 北九州市八幡東区平野1-1-1 国際村交流センター3F	093-662-0055 (093-662-6622)
福岡市	(財)福岡国際交流協会	〒810-0001 福岡市中央区天神1-10-1 福岡市役所北別館5F	092-733-5630 (092-733-5635)

## 国際協力事業団（JICA）とは、

開発途上国の経済、社会の発展に寄与し、国際協力の促進を図るため、国と国との約束に基づく技術協力を実施する外務省所管の特殊法人です。

具体的には、研修員の受け入れ、専門家の派遣、機材供与、プロジェクト方式技術協力、開発調査、無償資金協力の実施促進、青年海外協力隊の派遣、国際緊急援助隊の派遣等を行っています。

## 高校教師海外研修とは、

開発途上国の諸問題や国際協力活動に関心を持ち、授業やクラブ活動等で開発教育\*を実践・研究している先生方を対象に、実際に開発途上国を訪問し、国際協力の現場を視察していただく研修プログラムです。研修では国際協力の第一線で活躍している専門家、青年海外協力隊員の活動現場を訪問する機会を設けており、日本の国際協力や開発途上国が抱える課題を考え、理解する上でまたとない機会です。地球市民の一人として開発途上国の諸課題を自分自身の問題として捉え、その克服のために何ができるかを考える青少年の育成に努力しておられる先生方の教育活動に、この研修で得た経験・成果をお役立ていただくことをJICAでは期待しています。

※「開発教育」とは、ODA改革懇談会報告書によると、「開発教育とは、貧困・飢餓、環境破壊など国際社会・地球社会の現状を知り、開発・環境・人権・平和を始め様々な問題についての理解を深め、国際協力・開発援助の重要性についての認識を深めるための教育、また開発途上国と先進国との関係を含め、国際社会の問題の解決に向けた何らかの形で参加する態度や能力を養うことを目的とした教育である。」（同報告書・注19）

この冊子、あるいは国際協力事業団の事業に関するご照会は、下記までお願いいたします。

## 「いっしょに見つめようこの世界」

平成10年度 高校教師海外研修 ～授業に役立つ開発教育教材集～

平成11年2月発行

発行者 国際協力事業団

〒151-8558

東京都渋谷区代々木2丁目1番1号

新宿マインズタワー12階

TEL03-5352-5029 URL. <http://www.jica.go.jp/Index-j.html>



平成10年度 高校教師海外研修

■授業に役立つ開発教育教材集■

いっしょに見つめよう  
この世界

